

より来るか或は政務の失體より来るか今之を詳にすると至て難し又其原因單獨なるものもあるべし或は相互に交雜したるものもあるべし是れ余が一席の上にて説明し能はざる所以なり希くは諸君の注意講究せられんことを

以上述べ來りしものは歐洲各國に於て政治上の病弊妨害として數へられたるものなり蓋し歐洲の各國に於て政治上に係る病患妨害斯の如くにして社會上に於ては富者は益富みて貧者は益貧に陥るの慘狀ありて横議激論爰に起り共產黨あり社會黨あり虛無黨の如きあるに至りしは政治の病弊等の其一部の責を免かれざるべしと余は常に思へり

#### 社會の活動に關する病患及び妨害の徵候

社會病患の話は人に興味を興ふること能はざるは遺憾なりされど社會に病患あらば之を療して健康なる社會となし活潑ならしめざるべからず故に尙ほ社會の活動に關する病患及妨害の徵候を説くべし

○奴隸の風俗 ○人を私有物にすること 奴隸の風俗にして社會に存するときはその社會活動を失ひ發達を妨害すると甚しとす奴隸は何れの時代に始まりしかは

能く知らざれども西籍に徴するに昔希臘の碩學と稱せられし人の説に奴隸は人にして人にあらず半人半獸にして殺すも罪なしとあり又奴隸は天の人に與へし動物なりとあり奴隸を賤しむの甚しき斯の如し又人を私有物にするとは人を道具の如く物品の如く扱ふとにて所謂賣奴なり賣奴のとは西班牙人が亞非利加之黑人を捕へて其所領の米國の金鑛に鑛夫として使役せしにより黑人の賣買始めて其貿易甚だ熾なりしが世の開くるに隨ひ此非道なる賣買を禁止する國次第に多くなれり殊に南北戦争の後北米合衆國に於ては悉く賣奴を放解して人となし社會の惡風を除けりと云ふ其社會の活動を助成せし功實に大なりと云ふべし我國にて維新の後穢多非人を放解して常人とせられたるは其功賣奴の放解と同じかるべし今も西班牙、葡萄牙などの社會には昔の餘毒尙ほ去らずと云へり支那及朝鮮の社會には人身賣買の惡弊今尙ほ存すと云ふなり國家の文野盛衰は斯る風俗の社會に存すると然らざるとに因るものと云ふべし

○從僕の風俗 職業は生活の基人の勤なり人は其面の異なるが如く其意志も異なるが故に何業たるを問はず其得意の業に就き自由に働くことを得ば自ら學術も進み工藝も開け商業、農業、航海等凡百の職業益發達し社會の繁榮富實の源を開



くべし然るに従僕の舊習尙ほ去らざる國に於ては人は制縛を免れざれば自ら卑屈にして依頼の根性に習ふによりて職業の發達を妨害せられて發明奇巧の區域に至り得ざるは社會に此風俗の存するが故なりと云ふ

○貴族又は地頭が借地を取上ること○小作人を逐立つること○農人が放火や殺人の重罪を犯すこと 是等のとは余は見もし又聞きもせり是れ専ら農事に關する病弊にして封建の世に屢現はれて騷動を起せしとありたり世は變りて文明と稱せし歐洲にては昔の封侯の如き一種の黄金侯と稱するもの起りて廣大なる耕地を所有し或は之を農作者に貸渡し又は小作人を入れて耕作せしめ終に種々の制限規則を設けて聚斂を重くする抔利己の抑壓に従順ならざれば或は地面を取上げ或は小作人を放逐する抔の弊を生ずると見へたり是れ農國の最も憂ふべき所なり殊に農人は自然に従ひ季節を待て業を爲すものなるが故に自ら保守の氣風ありて質素淳朴に安ずるものなり是等の人にして若し放火殺人等の重罪を犯すに至らんか社會の活動を妨害するの凶兆なるべし

○獨立の小職業減少し大製造業増加すること 大製造業の盛大なるに至ると共に農業商業共に均しく發達進歩するを國家の盛運とす然るに時代は特に製造業

の流行を促し資本の力を張り熾に機械を設て多額の物品を製造し販賣して其利運に向へば地方より製造地なる都會に出でて其業に就き職工となり又其業の繁昌なると都會の有福榮華とに眩惑せられ都會には金銀も地上に落ち居るかの如くに妄想し友は友を誘ふて着實なる農業を見捨て僥倖に逐はれ空望に驅られ徒に恃むべからざるを恃み來り集る者多くは二十歳前後より三十歳前後の壯者にして爲めに都會は漸次に人員増殖の兆を顯し地方は漸次に人員を減じ獨立の小職業は漸く衰へ耕地は不毛になり農産物に減額を見るに至る此事は大に軍制にも關係ありと云へり都會は斯の如くにして人員増加するときは種々の惡弊を醸成して都會の體面を汚すと少からず彼の倫敦マンチエスター巴里伯林抔の如き工業製造の隆盛なる地に於ては此弊害殊に甚しと云へり我國に於て紡績業の發達せしと共に小職業の木綿絲取業は漸々に衰頹し今は殆ど全滅したりと云ふ將來我國に於ても製造業益盛大に赴くの時運に向ふべければ我社會の活動上には斯る病患を豫防し斯る妨害を制止するの工夫あらんとを希望するなり惡病の流行を豫防するは善し豫防せざるべからず惡病の微菌は顯微鏡にて發見するを得べし社會病弊の微菌は精妙の顯微鏡も之を發見するを得ず只統スタチスチック計の力を借



りて之を發見し之を豫防する方法あるのみ

○職工の同盟罷工 職工の同盟罷工の歐米諸國に起るとの屢なるは新聞紙に於て見る所なるが彼の職工は如何にも亂暴なるが如く思はれたれど其原因は遠く前世紀の學說より起りたるが如く考へらる當時の學說は偏屈にして理論の一端に傾きし弊あり社會は約束上に成立するものなりと説き經濟は需要供給及資本の理に因ると論じ人は人を利益とするより利益なるはなしと説けり斯る學說の流行によりて社會の結合力は漸く弛緩し個々人々に分裂するの風俗に傾きたれば個人の金力なき者は只金力ある者に壓倒せらるゝ状態となりて工業製造の盛なるに隨ひ職工は資本主の專制の下に屈服して種々の制限を受くるに至り恰も製造場の機械の如き有様に陥らんとするに至れりされど世の開化進歩の道理は斯る理屈と斯る私欲とを容れざるの時來れり職工は自己の權利を主張し就業時間長短のと子女教育のと財産保護のと等を以て自己の墮落を救ひ品位を回復せんと謀り資本主即ち製造主との争端を開き終に同盟罷工の暴舉と變ずるなり概言すれば職工の社會主義と資本主の私利主義との葛藤より同盟罷工を生むものと思はれたり此兩主義は利と理の極端なるものにて固より氷炭相容れず彼の學

説は之を仲裁するの道を忘れたり社會は中和親睦の世道を望むべし人は恩を施すの義務あり之を受くる者は之に酬るの義務を有すると云へり我國に於ては古來恩義の教上下一般に行れて私欲一偏ならず理屈一偏ならずして社會は幸にして中和親睦の大體を失はざりし也先年來西洋の學說東漸すると共に利己の極端なる私欲主義も傳來り稍其萌芽を發せしが大に社會に擯斥せられたりと思ふ然るに昨年征清の大事起るに方て古來恩義の教勃然として發動し微妙の効を奏したる如くに余は觀念せり將來この美風は我國の獨有として益發揮すべければ我社會の活動上には斯る同盟罷工の如き不祥なる現象を見るとなくして資本主製造主と職工との間相互に調和し工業製造の盛大を致し益國家の富源を開くべし○製造主が互に結約すること○製造場を鎖すこと 前に述べたる如く職工は其希望を遂んとして同盟を爲し罷工をなして之に抵抗すれば製造主も亦互に結約して之に對抗し或は製造場を鎖して兵糧責めをなし或は他より職工を雇備するの策を取り彼れの希望を拒絶せんとの決心を示し職工も屈服するとなく製造主も讓歩するとなく互に相譲らず終に破裂して多年の利益と經營の勞は無効に歸し左の結果を見るに至らん



○製造場又は機械等を打擡くこと 是れ社會主義と私欲主義と兩極端の争にし  
て毎も雙方の大損失斯の如くにして終るべし抑々之を未發に防ぎて社會の活動  
を平和ならしむること能はざるは其間に恩義と云へるものゝ行はれざるの徴候  
なりと余は思ふ

○婦人及幼年の職工の増すこと ○年頃の職工の減ること 人は年齢により各勤  
むべきとを務むるは文明の世道なり今日の幼年者が小學校に學ぶは其身を立つ  
る素養の勤なり壯年の男子の職業を爲すは其素養を社會に實行するの勤なり然  
るに年頃の男子の職工愈減し婦人及幼年の職工愈増すは文明社會の秩序を顛倒  
したる現象なり此現象は大製造場の所在地に於て之を見るべし爲に親子離散し  
て親子の情愛漸く減ずる等種々の弊害を生じ社會の活動を妨害すると多しとす  
○下等の税を出す者増加して中等上等の税を出す者減少すること 社會は表面  
の富榮を形容するの傾ありて其實相なる貧弱を顯はさざるとわれども隠れたる  
より顯はるゝはなしとの古語の如く年を経るに隨ひ其實相を納税上に顯はし來  
るべし斯るときは上等の税は中等に下り中等の税は下等に下りて下等の税を出  
す者のみ増加すべし此現象あれば社會の活動は如何なる不遇の有様なりや推し

て知るべし

○家なき者財産なき者の殖ること 斯る現象も亦社會の活動上に常に發する一  
種の病患なり家なく財産なき者は物の大切なることを知らず彼の放火を爲す者  
の内には多くは家なく財産なき者ありと云へり斯る家なき者財産なき者は殖え  
且つ前述の下等税を出す者のみ殖るの現象は先づ國家經濟の薄弱なる明證なる  
べし余試に其由來する所の因縁となるべきものを述べんに地震、風災、水難、飢饉等  
の天災親に早く別るゝとか杖柱と頼むべき子が早死したりとか商賣に失敗を重  
ぬる類の不幸又は世態の激變物價の變動宗教の迷信惑溺教育の不良濫費の奢侈  
自己の失敗不精怠惰の類にして之を細述するは數の盡さるる所時間の許さる  
所なり

### ◎法教の話

明治二十六年五月一日大阪  
同年同月四日京都に於て

一私は今般不圖としたる御縁にて此法座に出席致しましたが法教の事は更に存じ  
申さず承れば高祖日蓮上人の元寇の洪徳を頌表する爲に此法座を開かれたる趣  
凡そ古人の功德を頌表し後人の之を尊敬するは美事なり

法教の話



一右申し述べたる通り法教の事は不案内なる私なれども予が専門とする學科の上より聊か陳述する所あるべし

一人間社會の事は千種萬狀にして一々區別し難きものなれば之を攻究する學問の上にては失づ之を大別して三種となす曰く智識界曰く法律界曰く宗教界即ち道德界これなり

一智識界とは日常今日の務にして農業なり工業なり商賣なり藝術なり文學なり政治なり總て俗間百般の事務にして人間智識の作用に基くものにして即ち學校の教育に係る者なり

一法律界とは右日常の業務を防ぎて社會の秩序を維ち人間の生活を保護するものを云ふ故に宗教には法律の必要なしと謂て可なり

一宗教界則ち道德界なり宗教は善を勧め惡を懲すを本旨とす故に宗教界には惡なし萬卷の經典中一も人を害し財を奪ひ詐偽暴戾姦淫不徳等の事を戒めざることを無かるべし皆之を制し之を禁ずるを目的とす

一宗教の目的とする所物界の如く洪大無邊限界あることを知らず

一物界の如きは微細に至りては精功の顯微鏡も之を見ることが能はず日月星辰の如

き精功の望遠鏡も之を窺ふべからず例へば我地球と太陽とは其距離九千二百餘萬里なり恒星に至ては幾億萬里の距離に達するや天文學者にあらざれば之を知るべからず我遊星中尤も大なる星は木星なり其直徑は我地球の十一倍にして其實積は我地球の千四百倍なり  
木星と我地球との距離は

最大距離五億六千七百十二萬三千哩

最小距離三億八千四百二十六萬三千哩

其 差一億八千二百八十六萬哩

なりと天文學者は云へり

一物の宏大なる此くの如く空氣水電氣磁氣皆物にして精神にあらず其至微なるに至ては亦之を極むべからず物の至大亦此くの如し

一宗教界則ち靈界にして其高遠なること亦計るべからずして善の光を俗界の生活上に及ぼし罪惡の原因を融解し去り各人相互の間を圓滑ならしむるものと思はる故に高祖日蓮上人も安國御勸中日蓮法華經之御使也云々經曰則如來使如來所遣行如來事又曰敢而非日蓮私曲只偏懷大忠故爲身不申之爲神爲君爲國爲一切衆



生所令上言云々

四〇〇

予は之を思へば其道德の靈界に於て高遠の地を占めたることを知るなり故に難に遭ふて難を恐れず獨り法華經の主旨を懐かれたるにより執權の世は數代を更め年を経ること六百有餘年なりと雖も今日法華宗は益々盛大をなすに至れりこれ日蓮高祖の靈界の高位に居て其宗教に光輝を及ぼされたる所以ならん今日此法座を開かれ高祖の洪徳頌表の典を擧げらるゝもの偶然にあらざるを知るなり予亦た此法座に列し此一言を述べ諸智識の清聽を冒すに至れる幸榮を謝す

◎統計の話 明治二十八年

此程加藤先生よりの書簡にスタチスチックの事を講演われとこの事に付きスタチスチックを題として一場の談話をなさん  
スタチスチックと云ふ語は餘程議論の多き語にして我國にては統計と譯しあれども實際今日に至るまで一定したる意義の説明を聞かざるなり或人はスタチスチックとはエチモロジに適はざる語なり獨逸語にもあらず佛蘭西語にもあらず又羅旬語にもあらざる一種の混合語なりとの非難を加へ或人はスタチニス即チ有様と云ふ

語なりと主張す又或人はスタチスチックとは伊太利のスタチスカ即ち政治家と云ふ語より轉化し來りたるものなりと其說區々にして歸着する所なし而して所謂スタチスチックの定義に就ても最初は之れを知國學として説き次は國の著大學とし次は國政學とし又現在學として説き有様學として論じ或は之を數學とし又は之れを未發の理法を探究する學と説き又之れを學科にあらずとして歴史に配し地學に合し又は國法及び政畧に附し又マテマチックに入れ博物學に混じて説けり斯くの如く議論紛々として起り學者がスタチスチックの定義を論じたること凡そ百種に及ぶと云ふ

斯くの如くに幾多の沿革を經過して成長したるスタチスチックは近來に至りてスタチスチックは一は學科とし一は方法とす學科にあらざれば方法備はらず方法にあらざれば學科長せず  
と云ふに歸着することゝなれり

スタチスチックには目的あり責任あり方法あり其目的とする所は人間の現象なり其方法はシステマチックにして總容なる大數なり大數なりと雖も一時不圖起りたる事物の現象にあらずして永久に連續するものなり其責任はスタチスチックに關係する



現象の疑問に答ふること是れなり

スタチスチックはシステマチックの總容なる大數を數字に依りて表明するが故に其表明せられたる數字は即ち一の事實なり事實なければスタチスチックも亦用を爲さず試に二三の例を以て之れを證せん

今外國貿易の上に就き毎年其輸出入の高を比較し輸出多ければ喜び輸入多ければ憂ふ然れども輸出入の高を比較したるのみにて輸出多ければとて未だ喜ぶべきにあらず何となれば外商が内商に賣渡したる直段と税關に届出たる直段とは大に差違わるべし外商の利益となるものは皆彼の手歸して或は之れを内地に運用するものもあるべく或は之を化して物品として輸出するものあるべし金銀貨幣地金等に至りても亦同じ其他海外留學者等の爲替金又は爲換相場の損益金の如きものもスタチスチックの方法を以て集め之れを分類し之を比較し之れを表明して後ち始めて外國貿易の盛衰を語るべし

過日或人來りて日本の金銀鑄造高を示し日本には凡そ一億二三千萬の金銀貨幣のありべき理なりと語り依りて其鑄造中には政府の鑄造もあるべく人民の願に出たるもあるべく外國人の依頼に出でたるもあらんが其内譯は如何と問ひしに夫れ

は明ならずとの答なりき單に鑄造高のみを見て之れを現金有高なりと速了して經濟を論ずることあらば大なる過を惹出さんスタチスチックの思想是に於てか大に必要なり

スタチスチックは國人の消長盛衰を知るべきものなり之を知るは一大事たること論なし昔より世界の國人の消滅せし事例多し今日にても布哇土人の如きは消滅に傾き居るものなり又朝鮮の國人は如何なる變動を起し居るや某國は如何なる形勢なるや一々スタチスチックの方法を以て調査したらんには大切の現象を發見して驚くべきこと多からん

又某國に於て四千萬の人民ありと假定せんに此四千萬人は動かすべからざるの基數とす此基數のみにては誰も四千萬人の國人ありと見るより外其他は何も確かに知ること能はざるべし故に四千萬人を分解して男は何人女は何人又男と女を分ちて其人數の多寡を比較し又其年齡を初生より老年までの生存者を殘らず年を逐ふて並列し死亡者も亦同ふす斯くの如くにして其相ひ互に連續する所を見れば人生種々の道理あるを悟り深く思慮を要する所あるべし

民事の有様に就て云ふときは未婚者息子息女にして一回も婚姻せざる者あり婚姻



したれば即ち夫婦なり夫婦の内には初縁者あり一方は初縁者にして一方は再縁者なるあり再々縁者なるあり又離縁者あり夫婦の年に大差あるあり又婚姻未詳の變則者も多し是等の事を叙別すれば其國の風俗の良否を詳にして或は喜ぶべきものあり或は憂ふべきものあらん故に其憂ふべき者は宜しく之れを改良するの意見を定むるを得べきなり

又人間の生活力には強弱の差ありとすれば國人の壽命の長短を見るは最も大切なるべし生存者と死亡者との理合に依りて生存者一代の中數を四十歳とすれば文明の人としてはそれぞれの學藝を修めざるべからず技術を練熟せざるべからず而して其年間を二十五年とすれば残る所は十五年に過ぎず此十五年を以て社會の事業を營むべし文明なる事業の目的は十五年にては甚だ不満足なるべし如何に文明なる人の精神は多くの事業を成し遂げんとを熱望するものなるに其體軀は十五年の後即ち四十年にして終るときは精神と體軀との權衡を失ふと云ふべし或る學者は昔の人は肉體の運動の如く今人は精神の運動の如しと云へり此譬の當否は兎に角我々の體軀を長く保存し我々の精神に満足を與ふるとを計るの必要なしとは云ふべからず而して此等の事スタチスチックの學理と有法探討を以て人生の道

理を研究するの結果よりして幸ひに生命の保險をもなすことを得醫學衛生等の進歩をも促したるべしスタチスチックの開くるに隨て社會の開発進歩を補益すること舉て數ふべからず

今や征清の事局を結ぶに至り我國人も世界各国に對して平和の競争を爲すは勢の自然なり而して其勢の向ふ所は身體の働精神の勞從來よりも數倍すべし殊に戦争の後には生命を害するの弊少からざれば大に其變動を來すべし從來の如く我國の人員は年々増殖すべきや否やスタチスチックを以て精しく其變動を調査し十年も二十年も百年も連續して調査するにあらざれば良結果を見ること能はず唯一時の結果を見て満足すべきものにあらざるなり人間の事は波濤の如くに或は進み或は退き或は盛んに或は衰ふることあり是れスタチスチックの必要缺くべからざる學理方法の文明社會に物興せし所以なるべし是れ誠に畧語なり

### 種痘の話

明治二十九年五月十二日  
善那氏大紀念會に於て

去る日委員長三宅博士より今日の大紀念會に於て私へ演説あれとの御文通私に於ては誠に名譽のことと喜びたり乍然此席にて演説する丈の學科を心得へぬにちと



門違ひの御申越かど存する内風と氣つきて先年私が蘭客種痘談と云ふ翻譯物を著はせしことがありしによりて其頃の封建時代には種痘の様子はとうゆうことでありしか夫れ等のことを話せとの意を推量して出演を承諾いたしました先年と申ても私の三十歳の頃で今年より三十八九年前のことなれば殆んど四昔し四十年斗の歳月を過ぎし昔の事で御列席の方々の中には未だ御産れなさらぬ方もあり御幼年の方もありて書物にてはとく御承知もあらんなれども私の話は或は御興にもならんが私も餘り古き事にて忘れし事多し只呼起したる記憶だけの事なり私の子供の頃天保の大饑饉後と覺ゆ長崎の町年寄役高島四郎太夫後ちに喜平と改名し號を秋帆と稱す誰れも御存じの西洋砲術の元祖此の人が蘭人に依頼して牛痘の種をとり寄せたり蘭船は年に一度極暑の時分に渡來する故牛痘の種の腐敗せし加して感染せず最早致方なければとて小兒に種痘して乳母を附けて渡來すべしと申入れたれども異國の婦人渡來する事は禁制なれば此禁を解く事亦容易ならず更に工夫して持ち來りしに終に其の種痘の効顯はれて忽ち國內に種痘は行はれたり今は電信一發して海外萬里の事を辨ずれども其頃は例規の外何事も國禁の時なれば蘭人も厚意を盡し高島の苦心を経て始めて其の志を遂げたりと聞く

新事業は悪口を招くの習にて種痘の悪評は始まれり私の蘭客種痘談を著はせしは其後十八九年も過ぎたる頃にて漢法醫者どもが之を讀みしと見へて種々なる妄説は私の耳に入り來る此の様なる書は世間を惑はすもので種痘をすればとて天然痘は免がれず種痘をすれば天然痘は益々悪しくなる熾んになる元來牛と人とは違ふ其の理を辨まへずして人に植へたりとて何の効かある天然痘は人間の厄なり此の大厄を畜生の痘を種へて免れんとするは惑ひなり愚の至りなり種痘をするものは早く死ぬそれは神國の天罰なりなどと思ふがまゝなる悪言を吹聴しける折しもたま〜種痘せしものゝ天然痘に罹れば夫れ見たことよと己れ先見あるが如くに誇る當時は鎖國の世で儒者は關邪小言と云ふ書を著はし攘夷家は漸く氣煽を吐く時で同氣相投じて西洋説を嫉むこと甚だし時代と事とは變れども人氣の鹽梅は丁度福澤さんの權助論の時に似たる様に思ふ其頃の人物は私と同じき殘生を保ちて昔しなせし事なぞ今さらに後悔して暮し居るものもあらん

蘭客種痘談のうち一ヶ條ほど畧ぼ記憶せし大意に若し種痘を怠りて天然痘に罹るものあらんには其家の不幸は勿論其災は近隣に蔓延し遂には全國にも及ぼして人命を失ひ財産を奪はる事夥し譬へば一家に火を出して四方八面に延焼し焼き盡す



にあらざれば止まざるが如し政府は嚴令を下して種痘を施さしめて宜しく之を防禦せざるべからずと時の政府に忠告せりその原書は蘭醫某より當時の執政阿部伊勢守へ呈せしを私へ翻譯を命せりと覺ゆ原書も翻譯物もいつか失へり天然痘の流行せし時代には毎年小兒の墓穴に葬むらるゝ者夥しき事なるべし又痘難に罹りて或は盲目となり或は醜るしき面相に變ずるもの數知れず其甚だしきものは滿面に黒痘を印し一生涯に婚姻を整ふ事能はざるものも亦多し可笑しき言を申すやうなれども世間にては其惡しき痘面の人を指してアバタヅラと云ひジャンコヅラと云ふ此字は何の義なりや知らず如何にも憎々しき言調の言葉なり其の人を憎みてにはあらずして其の痘の人を傷ふ甚だしきを憎みて云ふ事なるべし又二度ピツクリと云ふことあり人あり女人の後しる姿を見れば如何なる美人かを驚きて前より見れば面相の見るに堪へざるほどのジャンコ顔なるに驚く故に之を二度ピツクリと渾名せしなり

我が國の種痘は漢醫輩の囂々せしにも拘はらず論より證據の譬の如くに事實は毫も疑ひなければ國人に信用せられて年に盛んに流行して最早五十六七年にもなりぬべければ今は天然痘にかゝりて小兒の死亡するものも惡痘痕の人も聞くこと見ること罕なる程に世間の人は自然の眉目を存し容貌の美を添へたるなり左れば痘瘡の患ひを免れて子女の無事息災を祝ひて種痘の徳を稱するは常に聞く所なり然れども此大發明の我等社會に及ぼす所は人の之を稱するよりも尙ほ深き理由にあることならん今は昔に異なりて世間の婚姻を整ふるに都合もよかるべく隨て社會の秩序も自ら治まりやすく其の幸福を進むるにあるべきか若し此の理由存する事なくんば種痘の發明によりて人間の好顔美貌を添へたるは美術の進歩に等しとして之を金錢の奴隸とするも可ならんか若し可なりとして之を玩弄するに於ては其の結果は如何になるべきか或は恐る種痘の偉功も空しうならしめんか乍序一の疑問として諸君に問ふ

私は封建の時代より文明時代に迄幸ひ生き延びしゆへ殊更に感ずる事は昔の人の顔面の醜より今の人の顔面の美に移りゆきし有様なり此の有様は畫にも寫すべからず文にも筆する能はざるべし私などの如き老輩の眼中映寫してのこるのみなりと思ふ種痘の功徳斯の如くに大なるものなれば我が邦人の醫學者諸君の功勞に向ふて感謝する事も亦大に厚かるべきを信ず今日は先哲善那氏の百年前に種痘を發明せられたる日に當るを以て文明諸國に於て盛かんに其紀念祭を行ひ善那氏の偉



功を宣揚し以て科學界の一ツの明星として永く之を瞻仰すべし我輩も同感の人と共に聊か感佩の微意を述べ

◎人の死と生

明治二十八年四月十二日  
東京學士會院議談

人生社會は未來永久に繼續する者にして之を繼續して永久に傳へんとせば左の條々を調査研究して國運の隆盛富強を計るべきことなるべし以下各條に就て余の知る所を畧々述べし

其一 邦國共同社會の死亡と滅亡

○血胤同族の死の順序と壽命の長短又自然の死と非命の死

夫れ人の生涯は生れ來ると死し去るとの兩極に止るなり是れ誠に單一なる現象とす然れども其の終極なる死亡に至りては壽命の長短異同紛雜にして常無きの有様を見るべし人其の紛雜常なきの有様を見ては因果を説き未來を談じ世を厭ひ或は詩歌の種となし終に人生は浮世夢の如きの歎を發するものあるに至るなり然れども人生社會は此の現に存する社會にして人生は夢の如き有耶無耶の虚體にあらず現世ほど大切なるものは無し何となれば人事の總體に就て之を觀察すれば整然たる

る常則ありて存するを以てなり男女の出生と云ひ死亡と云ひ婚姻と云ひ皆それごとく法則ありて人力の及ばざる所の不可思議の大原因ありて存するが如きを觀る故に吾れは之を信じて自然の法と稱し天則と稱するなり即ちスタチスチックの學理と方法に因りて始めて之を發明する所なり

若し此の整然たる社會にして風俗悪しく陋習去らずして自然の法に背くこと愈々多ければ多きに隨て死の勢を増長せしむるは當然の事なるべし故に此の條々に從て調査を施し研究を積み死の順逆を觀て其の害となるものは之を除き其の弊あるものは之を矯め社會の壽命を永からしむるは國家を永久に保つるの要務なり

○自然の死と非命の死

自然の死 人の増殖するは事實なり人の死亡するも亦事實なり然れども人の増殖すると亡滅するとの比例に於ては大に差違あり此の差違の大小は國家の幸不幸に關係すべし學者の多年實驗する所に因れば自然の死と稱するものは概して言へば生來虚弱なる幼兒衰頹せる老者の死亡にして醫學の進歩發達するも之を如何とも爲すこと能はざるものとせり今此の死亡者は毎年生者五十七人八人の間に一人ありと云へり今泰西諸國の生者と死者との比例を取りて平均すれば生者四十三人餘



にして死者一人に當れりとす然れば自然の死と通常の死との差は、大約生者百人中零五分七厘に當るべし此の五分七厘の差は或は非命の原因により、或は疾病等の原因によりて、天然の壽を保たざるものなるべし、又我國明治十四年より二十三年まで十年間の平均は生者五十人にして死者一人に當る計算にして、泰西諸國に比すれば頗る幸福なるが如し、然れども自然の死を算出すること能はざるを以て、其の差の如何んを顯はすに由なし、先づ大抵同様の差を生ずるものとすれば、此の五分七厘の數は甚だ微なるが如しと雖ども、我國人民の大數上より算し來れば、亦毎年幾萬千の死數を見るべし、此の幾萬千の死亡の内、醫術衛生の効能は、病死の數を減少せしむること甚だ多かるべしと雖ども、非命に死する者多きときは、醫術衛生の奏効も之を補足すること能はずして、死數は益々増加するに至るべし、國家は豫め之を詳かにして以て其の救濟の法を設くる必要ありと余は信ず。

非命の死 非命の死の原因として見るべきもの甚だ多し、然れども此一席の講演にては盡す能はざれば、惟々其大體の原因を述ぶることとすべし、一は人間の種々なる、慾情粗暴、無智、輕卒、不注意より生じ、一は營業上勞働するの際、天災に遇ふより生ず、航海漁業、礦山等の如し、一は立國の制として軍隊の組織及び戦争より生ず、是れ死因の

強勢なるものにして、國民中最も壯健最も有用なる部分に向て侵害せらるるものなり、此外流行病又被殺自殺死刑等も亦其原因として數ふべし、今我國に於て天災其外種々の事故に因り非命に死したる所謂變死者にして、明治二十二年より二十六年に至る、五ヶ年の平均を擧ぐれば左の如し

日本變死即ち非命の死者

洪	水	六八三
海	嘯	一九六
難	船	二〇四
火	災	三四一
獸	害	八〇
過	失	七七一
其	他	三三三
不	詳	五一
合	計	一、三九二
被	殺	八四
盜	賊	一四七
怨	恨	一〇五
闘	毆	二七
拒	捕	二七
過	失	二七
其	他	四三〇
人	の	死
と	生	四二二



合計	一〇四〇
自殺	三九六三
入水して	二三六八
双物にて	三六三
銃砲にて	六四
毒薬にて	七五
其他	二五九
合計	七〇九二
途上發病	一七二〇
變死人總計	二二七八一

右自殺者の男女年齢及び自殺の原因は、第十四統計年鑑に記載せしを以て畧して載せず、茲に特に注意すべきものは、天災其他死亡者中、洪水、海嘯、難船、火災、獸害又蟲害に遇ひ死亡せし人数は、二千五百四人にして其の種類を示せしかば、大に世人の注意を促して豫防の策を工夫すべき便宜を得べけれども、過失其他不詳を合して不幸者一萬一千四百二十五人にして、總數の十一分の九に當る、此の大多數の不幸者は、遭害の種類を記載せず、只過失其他とあるのみなれば、之れに據りて害を去り命を救ふべき方法を考出するに由なかるべし、年々斯の如くにして經過せんか國家の損害甚だし、當局者少しく意を用ふべきことなるべし、茲に又千八百七十二年普魯西のスタチス

チック時報中載する所の不幸表と稱するものを見るに、各種非命の死者あり、參考の爲め左に之を譯出す

溺れて	江水、海濱、洋海、河川、沼、堀、湧泉、貯水等	二二三三六
落ちて	樹木、仕掛機械、家屋、岩、崖、井戸等	九六〇
壓死	陸地運送等にて	五四六
同	鐵道にて	四六〇
機械の爲め死す	粉引車、麥車等	二九三
焼けて	火、石油、燒酎、鑄造等	二〇四
熱湯にて		六六
窒息して	煙、瓦斯、窖内等	二八七
埋れて	砂或は土崩等	一一三〇
打れて	石、材木、荷物又は家屋の倒れる等	六五二
毒に中りて		七三
獸類の爲に	突かれ、噬れる等	一一〇
傷にて	物を切り又突くまで	二四
出血にて		一
當られ又は突かれて	職業機械にて	二二
銃傷の爲め		七四
銃器の自發又破裂の爲め		九
石の破裂して		六
爆發して		八六
凍死		一四二

人の死と生



雷死

日射病の爲めに

露天にて見附たる死骸

原因未詳の死

合

計

四二六

八五

一三

一四二

一七

六七三七

右表出する所に就て更に注意すべきは、各種の不幸者にして、毎年大約同種同数の結果を示すことなりと云へり、又其種類を見れば溺死の数は總数の三分の一以上の多きに及べり、溺死者中年長の数は、一千四百三十五人あり、若し是等の人にして游泳の術を習ひ得たらんには、殆んど其半数は助命すべきこと疑はざるなり、時は之を習ふを許せしならんに、此の簡易なる水練を怠り、多く不歸の人となりしなり、彼の數多き一類にして、高所より墜落して死する者は、先づ以て人間の輕率なる心あるを現示すと云ふべきなり

重荷等の墜落によりて打撃せられ死する者は、實に不時の災難とするも宜しく省察を要すべきことなるべし

陸地運送具の爲めに不幸の死を出す數は、鐵道よりも常に多きは異しむべき現象なりと附言せり

右に列載せしもの外、又非命の死として見るべきもの甚だ多し、嬰兒養育の怠慢よりも生ずべし、工場に働く幼童の職業よりも生ずべし、又職業中其類尠からず、更に孤兒院、貧院、懲役所等仔細に之を調査するに至らば、非命の死として見るべきもの幾許なるか知る可らず、抑も非命の死愈々多ければ、自然の死との比例に於て愈々差違を生ずべし、其の差違の大なるに隨て將來其の國は貧弱に陥るの徵候なるべし、又之れに反すれば其の國は富み且つ強なるべしと豫め之れを卜知し得べし、是れ死の自然なると非命なるとの區別を定めて以て、其の多寡増減を知るの要斯の如し

○親屬本族支族及び本國人移住民又人種の亡ぶこと

親屬本族支族は、一國の社會を成立せし始にして、我國の四姓の種族の如きも亦我が社會の成立を助くること多かりしなるべし、社會の成立繁盛するに隨て、本國人の外に他邦異種の人民漸く移住し來るものも多くなり、自ら生存競争を起し、世代變遷して或る族類は興り或る族類は亡び、各其盛衰を異にすることあり、畢竟某の族類にして、身體精神共に健康を保持して艱難辛苦事に堪ゆるものは存し、之に反して某の族類は奢侈安佚に流れ、身體精神ともに微弱ならしむるものは亡ぶべし、優勝劣敗の理も亦此の如きか

人の死と生

四一七



○親族同族及び同種族の人民を奴隸として賤むこと、又其財産を奪ふこと、之を放逐すること、更に其根を剷り盡すこと

東西古今の史に載する所此の例尠なからざるべし昔時我國に於ては源平兩氏の争ひ等の如く、近時に於ては朝鮮國內の軋轢の如きも亦其一例なるべし、是れ皆内訌の結果なり、此等の事蹟は歴史に載せて明瞭なるべしと雖も、今の文明社會にして、其の裏面に於ては親族同族の亡ぶるあり、財産を奪はるゝあり、奴隸の姿と變するあり、其所爲は異なりと雖も、歴史の所謂骨肉相ひ食み同類相ひ戕ふの情態は殆んど同じかるべし、人自ら倒るゝものは自業自得の罪己れに歸すべけれども、人にして他を倒すものは他の罪を負ふのみならずして、又社會の罪人たるべし、其の弊害の及ぶ所愈々廣ければ、愈々國家を微弱ならしめ、死亡も亦多からしむべし、故に文明を進め國力を強大ならしむるには、此の箇條に據りて調査を精密にして以て之を矯正するは國家の任たるべし

○親族同族本族等の壽命に長短あること

一國の社會は親子なる家族相ひ集りて一大團結を爲すものなるが故に、文明の社會に於ては其族類に就て壽命の如何んを知るの必要起れり、何んとなれば其の社會を

組織する一家の父母子女にして短命なるもの多くあらむには、社會の基礎は常に動搖して國家の堅固を缺き、文明の發達を滯止するの憂を免かれざればなり

○人種の變更すること

人種にして白黄黒色の人民雜交して子孫を生ずるに於て、其の性情と其の體軀とに必ず變更を生ずべし、然らば何れか優り何れか劣る、其の優劣は大に國家後世の盛衰に關係する所あらむ、北米合衆國にて、之れに就て種々の研究をなせしは、思ふに將來國運の如何を豫知せんと欲するが爲めなるべし、我が國に於ても各色の人種雜居するの後は、本國人種に如何なる變化を來すべきか、多年を出でずして之れを調査研究するの必要を感ずべしと余は思ふ

抑も今日の文明世界は研究の時代なり、此の如き學科研究の光明は、世の暗黒弱點を照らすの効を奏すべし、故に諸科學研究の盛んなる國は、將來繁榮の希望益々大なりと云ふべきなり

◎遠忌は佛説にあらず

明治三十年二月  
宗教第六十四號

近頃函を開きて反古を探せしに、嘗て寫置さし一紙あり、披き見れば吉宗公政令

遠忌は佛説にあらず



の一なり。讀下すれば佛者の説を以て佛者を責む。佛徒自ら責を負ふ。天下の人誰か又嗷々之を非議するを得むや。吉宗公天下の大弊に遭遇し、超然として以て政を行ふこと三十餘年、時弊を矯め新政を施す所概ね斯の如し。此の事小なれども之を大局に施さば、大功なきにあらざるべし。今や時勢異なりと雖ども、渺々たる政海中此の超然主義を操るの餘地なからむや。其の幾微妙味を共にする人と共に樂む。マキャベリー者流いかにかや。記して以て貴社に投ず。取捨は記者大人の隨意たるべし。

吉宗公御治世の時御尋には或書曰平家の盛なりし時櫻町中納言成範卿の御父少納言信西入道の十三年忌に當り給ふ其比天下の碩學秀才と云高野山の明遍大僧正は信西入道の御子にて成範卿の弟也爰を以亡父信西の十三年忌の佛事作善の事は明遍僧正を以て是に任せんと思召高野山へ使をして明遍を呼給ひ此法事のことを相談ありしに明遍の返答には高野山に住て幽谷の間に晝夜わがちなく一切經披見に眼をさらすといへども死て一周忌の弔ひ三年忌の弔ひ乃至十三年三十三年五十年この遠忌を弔ふ事佛説佛經に會てなき事也釋迦の教は譬ば極重惡十罪のものたりとも引導の功德を以て成佛させんと有るちかひなれば三年も七年も十三年も迷て

流轉する亡者はなし此説すら未顯眞實の時の説法にて釋迦いまだ眞實を説給ぬ時也佛法の眞實を以ていふ時には人死て魂魄空に消へ其體土と成て何を善とし何を惡とし何を罪として是を弔ひ是を供養する事あらんや佛法の眞實と方便と右の如し然れども儒家に祖の神靈を祭り神道に祭禮と云ふ事あり是は去るものは日々に疎くして親にても子にても其死たる時の様に不存五年も十三年も隔る時は親の事も子の事も疎く成るを以て其志を改んため三年七年十三年等の祭を致事也是を當代の出家まなひて遠忌弔ふ事なれば拙僧へ父の十三年忌の法事御任せあらば佛法にて申せば御無用に可被成候儒道神道にて被成候はば格別と被仰たり又東見記曰京都相國寺瑞溪考一切經曰此經内年忌記服の事無佛説之論其後假儒者祭禮始年忌と云と被仰

上意に彌明遍瑞溪が博學故右之通に申たるが誠なりや又今出家も俗も親の年忌杯は弔ふ事と存て佛事法事を致す事誠なりや此兩様の内眞偽なくて不叶此旨委細にあらため可致返答迄諸宗の名ある和尚長老へ被仰付候處彌明遍僧正瑞溪和尚の被申たる通に候也諸宗の出家より是と正敷申上る坊主一人もなし依て御代々上野又は於増上寺御弔ひ事には萬部なりしを右の御改より以來半減に被遊て五千部にな

遠忌は佛説にあらす



り千部より五百部に被遊候旨被仰付たり

●亡國亡民

明治三十年一月十日  
東京醫士會院講談

本題は當院雜誌第十八編之五に人の死と生と云ふ余の演説の續きにして八九ヶ條あり亡國亡民とは其の全體の上よりいふことなれば條々に適當したる題にあらず聽衆諸君之れを諒せられよ

地方住民の生活力に強弱あること

其住民の壽命に長短あること

凡そ國民の生活力は平等一様なるものにあらずして其の強弱の差は千差萬別殆ど其の顔面容貌の相違あるが如くに異なれり而して其の強きものは壽命長く其の弱きものは壽命短きこと自然の結果にして其の身體の強弱壽命の長短の分るゝ所之を小にしては一家の幸福に影響し之を大にしては一國の盛衰隆替に至大の關係あるは勿論のことなり

生活力は各地方の住民に於て同一ならざるは各箇人に於て一様ならざると相同じ是故に其の生活力を知らんには各地方ごとに調査し各住民ごとに調査して始めて

生活の状態壽命の平均を知り得るに至るべし之を知るは甚だ困難にして一朝一夕の能くすべきにあらず必ずや多年の調査と實驗とを経るにあざれば之を知ること能はずと雖も國家の富強を進めんには國民の生活力を詳察熟知するの必要あること猶ほ醫士の患者を診察して生活力の健否強弱を察知するの必要と同一のことなれば國家の務めを以て自ら任ずるものは是等の事を怠り空しく歲月を閑過すべきことにあざるべし

上に述ぶる所の生活力の反對即ち死亡を促す所の原因は之を大別すれば一は風土の有様に因り一は社會の風俗に因るなり抑々死の原因をして多からしめば壽命を短縮し生活力を薄弱ならしむるを以て苟も風土の有様社會の風俗の死亡を促すの原因たらんものは之が退治に務むべきは醫術の責任なり行政の責任なり

是故に人民の生活力をして強くして且つ長からしめんには醫學と衛生との進歩を圖り社會の惡習を改善し文明の増進を要すべし死亡の原因にして人力の如何とも爲すこと能はざるものは先會にも述べしが如く薄弱なる幼年者と衰耗せる老年者にして是等は實に詮方なきこととす之に反して不時の災難又は疾病等の爲めに幾多の人命を失ひ俄に生活力を滅殺するが如き是等の災害を除くに熱心盡力するは



文明の責任を重んずるの國なりと云ふべし  
國民の生死に變動あること

某國の人員にして定止の數なるものを表示することあるは是れ思想上の假像にして實際の眞像にあらざるなり人の數は頃刻も定止するものにあらず吾人の住居する所の地球の發生すると共に萬物も自然に發生し人も亦發生し萬物均しく變動を受くるものなれば人も亦其の變動を免るゝこと能はざるものとす  
此の人の變動する有様を人生の運動と云ふ是故に國民の狀態如何を知らんと欲せば先づ此の運動を知るを最も大切なるものとす  
其の運動の結果として一は人民の蕃殖することなり一は人民の亡滅することなり是れ常に人の能く知る所なりと雖も其増減する所の形狀に於ては相齊しからざるものにして或は速に増減することあり或は徐々に増減することあり此規則を分つて四種と爲す左の如し

甲は不同にして速に増すなり

乙は不同にして徐々に増すなり

丙は不同にして徐々に減するなり

丁は不同にして速に減するなり

世間にては人は何時も殖えて千代萬世に傳ふべしと思ふも一應道理なきにあらず然れども人間の生死増減の數理を問はずして唯々人の殖ゆると云へる一つの呼聲に據りて國家は永久に存在すべしと云ふは想像の談に過ぎざるべし世界は人種の競争場にして將來人種の興廢存亡何れに歸すべきかは是れ大問題なり蓋し國家に病弊の隱伏すること多ければ國民の死亡に關係することも亦甚し是故に文明の國に於ては是等の科學の研究を獎勵し其調査の結果によりて病弊あるを發見すれば之を矯め妨害あるを認むれば之を除きて國力を強盛ならしめ以て國家の安康人民の生存を無窮に傳へ人種の競争場裡に勝利を占むるに至らしめんと務むるは文明の政府たるもの、大責任たるべし

滅亡したる國 存在せる居民

古來世界中に國を建つるものにして今は亡びて其國名のみを歴史上に遺すもの尠しとせず又亡國の人民にして既に泯滅に歸して痕なきものもあるべし今僅に存在するものもあるべし布哇の居民亞米利加インジャン等の如きは或は此類ならん支那に於ては居民は現に存在するも國號を革むること既に三十有餘なりと云へり現



全世界の邦國にして僅に國脈を存するも將に衰亡に傾き將來の維持に疑ひなきこと能はざるものも亦多し土耳其、波斯、暹羅、朝鮮等の如きは或は此の類ならんか將又今日文明國と稱するものと雖も或は滅國亡民の禍源其の中に伏在して未だ發せず人其の幾微を發見せざるものも亦無きにしもあらざるべし

世界に國を建つるもの其の禍源の由て來る所の遠因を推究して近因を察知し以て自ら戒め遠く邦國の長計を慮からしめんが爲めに此の條を設くる所以なり

#### 存在せる居民の非業の死亡

某の居民にして他國に制服せられ隸屬の民として輕侮せらるゝのみならず生命財產を侵害せられ賦税の苛重に苦しむは弱者の強者に對する例なるが如し居民其の壓制に堪へざるの餘り干戈を執りて自國の恢復を圖るも人心一致せずして力窮し勢盛りて非業に倒れ滅亡するの國民あること今も猶ほ古の如く遠く歴史を繙きてこれを證するまでもなく現に後印度諸邦及び亞弗利加各地の情況等に見て思ひ半ばに過ぐるものあらん近時ヒロピン群島の擧の如きも亦上の如きに終らんかと思はるゝなり

又眼を轉じて一方を觀察すれば近時世界の大勢は交通貿易の勢止むべからずして

外國と通商を始め港灣を開きて互市場と爲し文明の新事物俄に續々輸入するに方りて舊を厭ひ新を喜ぶの人情に投じ其の工藝の美は人の耳目を眩惑し其の風俗學術に至るまで悉く羨望の種子たらざるはなく欲望の念愈々盛んにしてこれを需むること益々切に忽ち舊情態を一變して新面目を開き取捨鑑別の明を缺くが故に玉石ともに混交注入するに際し利を得るは難く弊を生ずるは易く未だ舊弊を去り得ざるに新弊更に交々加りて奢侈に財を浪費し宴樂淫逸の流行を促し梅毒の蔓延國民の體力を衰耗するに至るも之を防遏するの智識に乏しく漸次非業の死は人民を驅りて北邙の烟と化し自ら滅亡するものもあるべし恐れざるべけんや

#### 國民の瓦解して分散すること

世界は廣し人類は様々なり古代の人民にして居國は既に亡び其民のみ今に相續して地球の各所に存在するものあり其の最も著しきものは「ジプシー」人の如く猶太人の如き是れなり

「ジプシー」なる人種は國によりて其名稱を異にせり英國にては初め埃及より入り來れるを以て「エジプリアン」と云ひ後「ジゲニー」と云ひしとなり佛國にては「ボヘミー」と云ひ獨逸にては「ゼイゲネル」と云ひ奥國及び匈牙利にては「ジガニー」と云ひ和蘭にて



は「ヘーデン」と云ふが如し。

古昔此の人種は印度のインジュス河邊の居民なりしが外寇の爲め殘虐に遇ひ懼れて四方に離散し歐洲に入りしは千百年頃なりと云ふ

「ジプシー」は群を爲して諸方に徘徊し居所を定めずして去來常なきを彼等の習とせり其の生業と爲すものは手相を占ひ踊を爲し音曲を奏す彼等の耳は妙に敏なるが故に音調は其長所なりとす衣服は極めて艶麗なる色を好む彼等は外見よりは甚だ横着にして奸曲なり物を覘ふに巧にして深く探索を爲せり乞食竊盜は彼等の常なり飲酒を好み糞を嗜むこと甚しくして貧に陥るを意とせず汚穢を厭はず不潔を知らず怠惰にして怨恨を抱き卑怯にして暴悪なるは其性なり同類仲間には猛烈なる所業を行ひ外國人との争ひには逃げ去るを常とす男女は同類にあらざれば婚姻せず其婚姻は固より無法の亂婚とす歐洲各國の政府に於て「ジプシー」人種の治安を妨害するの故を以て法外ものとして放逐し殺戮するに至れり

「ジプシー」人種は文明の世に交りて文明に移らず化せず一種遺傳の陋習に安んじて改むることを悟らざる蠻民とす其の歐洲各國に徘徊し流轉し居るもの七十萬餘なりとセンサスの調査には報告せり其他亞細亞大陸亞非利加及び南北亞米利加に蔓

延し居るもの許多ありと云へり

「ジプシー」遊民中至て少數のものは匈牙利の一小部落に住して耕作人となり職人となり奴僕となるものゝ外悉く森林に伏し原野に臥し穴居を爲し或は車を以て家となし家族を乗せて四方に徘徊せりと

「ジプシー」の宗教として信仰する所は木像なり萬神なり運命なりと又云ふ彼等の敵視して最も嫌惡する所のものは世の開明に進むと山林原野の開拓なりとなり

猶太人の國を失ふこと既に二千五百餘年前の昔しなり猶太人は實に上古にありて亡國の浪民となり世は物換り星移りて各國の人民盛衰興亡の運に遭遇するも獨り猶太人は依然として其固有の性質を維持して失はざるは歴史上顯著なることにして今も尙ほ之を實驗することを得べし

猶太人の精神の堅固なるは他の異教徒よりも甚だ勝れりと雖も之を羅馬人に比すれば豪毅の威勢なし日耳曼人に比すれば自由の氣象に乏し然れども猶太人は時の勢を察して能く世と推移り之に處するの術を知れり是れ彼等法教の信念により彼れの金貸業及商賣の熟練によりてなりと云ふ

猶太人は法教に頼りて精神を堅固にし勇氣を養ひ忍耐を強くし事に對して謙遜な



り柔和なり其業を務むるに確實なり敏活なり人情を看破して如才なく金銭の勘定に於て苟も許さず

猶太人には始祖モセスが天地の一神を教へ其教旨は他の異教より特別なることを知らしめ神の法律を心根より觀念せしめたり代々の牧師も之を遵奉して其の布教を勤めしなり

猶太人の耶蘇教國に散居するものは一箇の人民として相互に結合せしを以て耶蘇教國人より交際を絶たれ壓倒せられ時に迫害に遇ひ生命も財産も蹂躪せられたるなり

フレデリッキ二世の時に及びて始めて猶太人を王家の隸屬となして其生命財産を保護せしめたり然れども世間個人の關係に於ては猶太人の迫害は息まざりける

歐羅巴に於て猶太人は土地の私有を禁せられ手職の業を許されず只金貸業及び商賣を行ふことは自由を得たり是に因て猶太人は昔の如くに只管利益心を起し高利を貸して萬金の富を致すに至る

事は時勢につれて變遷すると共に猶太人も改宗するものは歐土の風俗に移り其の言語を用ゐる其の開化を賛し其住地の爲めに繁榮を助成するものあり若し猶太人に

して斯の如くなれば化外の異人にあらずして全く國民の仲間に入り平等自由の人となりて其法律の下に生活するを得るに至りしは是れ世界人道主義の一大進歩を爲せし徴候なりと云ふべし

然れども猶太人の今に其願望せる未來の猶太王即ち救世主の觀念は其の胸中に深く秘藏せりと云ふ今此の猶太人の各所に散在するもの伊太利に二萬九千二百三十人希臘に六千人埃地利及匈牙利に百四十萬人露西亞に百五十萬人なりと人種調査は記せり其他歐土各國及び亞非利加に於ては其人員詳かならず

余曾て聞く近世の大爲政家と稱する英相故ビコンスフィールド侯及び獨逸にてはビスマルク侯に敵對せし故ラスケル氏又世界第一の金満家ロスチャイルド氏の如きも猶太人種なりと猶太人種のごとは遠く未來の問題たるべし

右に述べし「ジブシ」人猶太人の事余の知る處大畧斯の如し今試みに此二人種と支那人と互に相似たる所を比較せんに

支那人の忍耐にして貨殖に汲々たるは殆ど猶太人に似たり支那人の富を造りて社會の表面に立ち文明の實業を採りて世界の各人種と競争するの志望を抱けると「ジブシ」人の懶惰にして貧困に安じ社會下層の濁流に浮沈するとは大に異なるも支



那人の群を爲し世界の大陸に出稼し労働を厭はずして利を追ふは恰も「ジブシー」人の大陸諸國に流浪して生を求むると相似たり

「ジブシー」人の信仰する所のものは偶像なり運命なり是れ能く支那人の信仰するものと相似たり其汚穢を意に介せざる亦能く相似たり而して一は社會の労働人民なり一は社會の浮浪亡民なり

支那人は商賣に巧みにして賤業を厭はず身を勞して涓々の利を求め只管富有の道を務む其の商事に敏捷なるは猶太人と兄たり難く弟たり難からん只々猶太人は金貨等の業を務めて身の危険を避くるが故に死亡少くして子孫能く蕃殖すると其の信仰は未來永遠の望を抱くとは支那人と比し雲泥の差あるものとす

●國の零落と滅亡

明治三十年六月十三日 東京學士會院講義

本日は右の題に據り西史中著名なる二三の亡國を撰みて之を説述せんとす余が常に聞見する所によれば國の亡ふるや之を世の洗季と云ひ末世と云ひ運命と云ふの類にして自然の曆數に因縁するが如く思惟す然れども天も時も共に與り知るべき事にあらず其國を亡ぼすものは其國民の自ら誤り自ら責を負ふべきことにして其

責を他に嫁すべき事にあらずと余は考ふるが故に西史に載する所に隨ひ彼れを取り此れを撫ひ之れを並列して以て其當否を試みんとす固より畧述にして地圖を缺き曆年を畧し豪傑の所爲等を省きしものにて誠に大概のみ

バビロニヤ

バビロニヤは古來有名なる國にして其位置は比耳西亞灣に臨みユーフラテ河の兩岸に跨り其都城には高塔百五十個處々に聳立し百個の銅門を設け繞らすに城壁を以てせり而して其壁の厚は四頭立の馬車二輛を駢馳するを得たりと云ふ其壯大なること察するに堪へたり此國古へ有名なる陸地貿易の大市にして四方に通商交易の大道を有せり即ち東は印度に通じ北はアルメニヤに至り西はヘニシヤに達し南はアラビヤに及びて亞細亞無盡の産物輻湊し富盛繁華の一大都會なりしが專制の國政治まらず宗教衰退し風俗壞亂して國人奢侈淫逸に流れ時にペルシヤ王サイダスニ攻められて終に滅亡せり是れ紀元前五百三十六年にして我安寧帝十三年の頃なりき

エジプト

エジプトの地形は通商互市の便最も良し古へ此國外國商船の出入を許さざりしと

國の零落と滅亡



雖も陸地の貿易に於ては遠く隔絶せる各國と通商し結隊の商旅輻湊の大都會にしてアフリカ内地の産物象牙、烏毛、黄金等會萃し印度よりは香料アラビヤよりは香料等を輸入し互に賣買せり後ヒニシヤ人はエジプトの一地を得て其商品貯藏の所と定めたり此の如く管に外國の貨物輻湊するのみならず自國の産物も亦甚だ多くして穀物、麻綿花等を出せり其紡織に係る亞麻布、綿布、毛布、毛氈尤も有名にして又百種の陶器も製出せり

エジプト王プサンメテキユスの時に至りギリシヤ人及びヒニシヤ人ニ許して港を開き始めて海商を通じ盛に貿易を營み諸國皆この互市に仰ぎしが其穀産の饒しきによりて之を諸國の穀倉と稱するに至れりエジプトの安寧豊富の極盛は此時代を最とすエジプトの富盛に至りしは竊かに遠近の嫉妬を招くの媒となり遂に外患の禍を醸すに至りベルシヤ王カムベスの亂入に遇ひ國王プサンメテユス捕虜の身となり國亡びてベルシヤの版圖に屬せり是れ西曆紀元前五百二十五年の事なりと云ふ後エジプト人屢々蜂起して恢復を謀りしも其所志を達する能はずベルシヤの羈絆を脱すること能はざりしが其後マセドニヤの歴山大王の征服に遇ひ其制馭の下にありしが歴山大王の死後其將プロマウス此國の王位に即けり其後羅馬人の爲めに

征伐せらるゝ等を始め世々の外患内憂を経て今日の衰態を現し終に命脈を存するのみ

## ヒニシヤ

ヒニシヤ人は往古航海人民と稱せしが盛に貿易を行ひしも亦此國人を以て最とす其航海貿易のことに於ては發明する所多く夜間の航海に光芒の燦爛たる七星を知り大熊の星辰、小熊の星坐に隨て海路の方向を取りしはヒニシヤ人に始まりしなり又紅海より船を出してアフリカを周航し其海濱に於て肥沃の土地を選み此處に播種し再び其地へ來りて之を收穫し三年を経て地中海よりエジプトに歸航せり古への史家ヘロドテスは云へり

ヒニシヤ人は地中海の各地に航海互市の事業を開きしのみならずジブラルターの海峡を出て不列顛島に至り始めて錫を發見せしが故に之を錫島と名け又獨逸の東海に至りて琥珀を見出したり其他玻璃の發明も紫色の發明もヒニシヤ人にして其紫色の發明よりして自國製の亞麻布、木綿、毛織の類は悉く之を紫色に染めて諸國へ販賣し名産として甚だ有名なりしと云へり千數百年の後米國にて「コセニル」蟲の發明ありしに由りて古人の製法は全く絶えたり毛を織るの法もヒニシヤ人の意匠に



出たりと云ふ

ヒニシヤ人の工作する所爲は或は玻璃に彩色を加へ或は琥珀を以て細工物を作り或は印度アフリカより貴石寶玉を輸入して琢磨彫鏤の巧を施して之をバビロン大都に鬻ぐこと夥しく又ベルシヤ灣及びセーロンの眞珠を以て奇巧美麗の手工を加へ東方の國とは象牙の交易甚だ盛なりし又西班牙の銀を取りて銀器を造り之をアラビヤに送りて金と交易を爲すに金と銀との秤量を同じくせりと云ふ其外アラビヤ産の香料、薰水、芳油を以て猶太及び希臘等の國に行商す此各國に於て神祭禮拜には必ず之を用ふることしせしを以てなり又セーロンの桂子、ベルシヤの亞麻布及び絹、パレスチニヤ及びシリーヤの葡萄酒と油とをエジプトに運輸して穀物と交易し北方に於てはアルメニヤの銅鐵鋼及び馬の互市場を開き殊に厭惡すべき奴婢の賣買盛なりき此奴婢は即今のゼオルジ及びシルカスシーの人にして古今共に人類の美種と稱すと云ふ

ヒニシヤ人の貿易に勉むる所上に述ぶるが如し而して其南東の諸邦に貿易を擴張するに及びベルシヤ灣に於て其貯藏所を設け貨物を印度に轉輸するに便せり

ヒニシヤ國此の如く昌盛を致すに隨ひ細民も亦隨ひて漸く増加せり是に於て新地

を選びて之を移し又貿易も益々便ならしめんと欲して諸方の海濱に殖民地を設立せり又國內不平の徒自ら本國を去りて他邦に移り至るもの少からずして其殖民地の最も名あるものはシプリウス、シテウム及びアフリカの北濱に於てはエシカ、カータゴ及びレプチス、西班牙の海濱に於てはタルシス、カルテヤ及びカジス等なり

ヒニシヤ國の位置地中海の東隅に在りて古世界の中央に位し各國と交通貿易の要地を占め海商も亦其便利を得て絶えて武強を務め攻伐を謀り戰勝の利を欲することなく數百年間惟々貿易を廣め工作を興し藝術の道を開き以て其國を治めしに因り國大に富めり其富むに隨て國人奢侈に流れ都會なるチリュスは殊に甚しくして其貿易の盛大なると國の安富なると華美の甚しきとは傳教使ゼサヤエゼシールの古書に詳なりと云へり凡そ世界上の事時替り世移るにつれて皆變ず彼の富盛安榮なるもの固より永久一定の理なきこと歴代の史冊に著明にしてヒニシヤも亦其理に漏れず其替廢を速くに至れり

ヒニシヤの末造に至り希臘の貿易益々盛大に越さしを以て大にヒニシヤの衰運を促しカータゴ人も亦其本國なるヒニシヤの貿易を壟斷せんと欲して又甚だ之に損害を加へたり此時紀元前六百年の神武帝の頃にしてバビロン王ニブカドニサル兵に



將として都會なるチリヌに攻め入り攻守の戦争十三年に及び都城遂に陥れり。パピロン王城中に入りし時は人家皆破壊し財貨は悉く運び去りて都人海中の一島に逃れ其舊城に據る後再び繁昌の區となし三百年間古世界の大會と稱するに至れり。然るに紀元前三百三十二年の孝安帝歴山大王又之を攻め圍みて海中に幅二百尺餘の堤を築き島と陸との通路と爲し以て攻勢を便にせり都人苦戦防禦すと雖も終に力屈して四方に潰散し或は財貨を携へてカータゴに走るあり或は捕縛に就きて磔せらるゝあり奴隸として賣らるゝもありて國終に滅亡せり歴山王の築造せし堤は今尙は存すと云ふ

## カータゴ

カータゴは本ヒニシヤ國の殖民地にして阿非利加の北岸に位し地中海の濱にして當今のチニヌを距ること遠からざる地なり其地形一面は海に瀕し三面は陸地に接するが故に水陸貿易の要地とす都城の西方に二港あり共に航海者の爲に至便の港にして一は商船を置き一は軍船を備へたりカータゴ人陸地海上の兩方面に向て盛に貿易を營み國を富まし兵を強ふし四隣を睥睨するに至れり古史中曾て復たカータゴの如き富強の國あるを見ずと云へるを以て其當時の概況を推想すべし

傳へ云ふ紀元前八百八十八年の頃ヒニシヤの都會なるチリヌの酋長ピクマリオンの妹エルサス其夫を殺し其黨を率ゐて國を去り此地に來りて土人に一牛皮の地を請へり土人之を許諾せしかば乃ち牛皮を裁切して小なる紐となし之を以て一區を環繞して茲に占據せり是れ即ちカータゴなりと後漸く其土人に償ふ所の賦税を免れ得て遂に之と相親しみ兄弟同胞の契を結ぶに至り土人も亦其風に化せられ遊牧の生活を罷めて農業に就き永く土着の民となれり

カータゴ人曾て地中海濱に數箇所の殖民地を設けて領地を擴め又ヒニシヤ人の阿非利加開墾地を奪領して其近隣の遊牧土蕃と通商を始めたりしが此交易甚だ盛にして國勢隆盛の源となれり

此遊牧の野民は多く駱駝を飼養して以て商旅隊を結びカータゴ貨物を之に馱載してレイビ一の砂漠を過ぎエジプトに至りて交易し或は大砂漠なるサハラを経て内地スーダンに行きて交易せりサハラは幅員九十餘里間の難路にして旅次一滴の水を求めんとするも得ず又時に毒風吹き起りて隊商悉く斃死し或は砂塵波濤の如く起りて人畜共に埋没すること屢々これありしと云ふ又大砂漠を経て遠く内地に赴き或は山により或は湖によりて鹽を製し之を交易品とせり其鹽の價貴きは實に驚



くべきものにてスーダン人の黄金と秤量を等ふして換えたりと是れ隊商の歸路貨物中の第一の貴品たりしなり又奴隸の交易をなして或は之を他邦に賣り或はカータゴの水夫として使役せしがプニス第二戦争の時カータゴの大將ハストリニバル其海軍の爲めに此等の賣奴五千人を一度に買ひ用ひたりと云へり

カータゴの海上貿易も陸地貿易に劣ることなく甚だ盛んにして地中海西方の諸島西班牙及びジブラルター峡外の地等嘗てヒニシヤ人の至りし所はカータゴ人之に代りて航海貿易し又其土地に隨て新地を開拓せり然れども其新地の富強は却て本國に抗敵せんことを恐れ大にこれが壓抑を加へたり而して其隣邦と條約を結び交易すと雖も其意常に利己の欲を逞くし只管其國産の利を専らにせんことに汲々たりし

當時バリ、島サルジニー島エルバ島及びシ、リー島西班牙の沃地は悉く其所屬となせりバリ、島人は抛打に長ずるの故を以て之を其隊伍に雇役しマルタ島にては木綿と毛布とを交易しエルバ島よりは鐵と鉛とを納れコルシカ島よりは奴婢と雇兵とを取りサルジニー島及びシ、リー島は其穀倉たりし而して西班牙より出す所の銀甚だ多くカータゴ人ハンニバルの所有に係るベヒュロとへる銀鑛より産出の

額毎歳十六萬斤に下らざりしと云へり當時カータゴ人西班牙に一都を建て新カルタゴと名けたり即ち今のカルタケナ是なりと

カータゴ人も亦ヒニシヤ人の踪跡を追ふて英國に航して錫を得東海に往きて琥珀を得たり紀元前五百年中德天其國人ヒミルコンを船隊の長として歐羅巴西濱の地理を観察せしめ同年又國人ハンノーに殖民三萬人を屬し亞非利加の西濱に遣りて六箇所の開墾地を設立せしめたり其他ヘニス、モロッコとの貿易を便にし其工作の微物玩物を以て彼れの黄金象牙獅虎の皮と交易する等にて利益を得ること尤も夥しく大西洋中のカナリヤ諸島及びマデラ島に至るまでカータゴ人の移り至るもの多かりき

カータゴ此廣大の貿易に依りて國家富榮を致せしが故に歳入の税額國庫に收まるもの甚だ多し然れどもカータゴはヒニシヤとは大に異にして其商事を主とせず交易に安んぜず征伐の權を適用せしを以て水陸軍の費用も亦隨て多し其盛時には軍船三百餘艘を備へ陸軍には將士の外は皆他邦の傭兵なりしが此傭兵屢々蜂起して内亂を生ぜり

夫れ貿易を爲す國にして屢々兵力を用ふれば常に國を損害するのみならず遂に國



を亡すに至るカータゴ亦然りカータゴ人シ、リを取らんと欲して希臘の殖民地  
 シラキユセ島と交戦二百餘年國屢々困弊し遂に此島を奪掠すること能はず却て羅  
 馬と兵端を開くに至る是よりカータゴ羅馬と貿易條約を結ぶこと再びせり然るに  
 紀元前二百六十餘年<sup>孝靈天皇</sup>に至り遂に戦争起りて危急存亡の師を擧ぐることに三  
 たびに及び第一戦争の終りは紀元前二百四十二年なりカータゴ地中海西濱の地  
 は悉く之を失へり第二戦争の和議成りしときは紀元前二百〇一年なりカータゴ海  
 外の所領は皆羅馬の有となり第三戦争の終りは紀元前百四十六年にして即ちカー  
 タゴ滅亡の時なり<sup>開化天皇</sup>  
 此戦争の前カータゴ漸く奮ひ興復せんとする勢ありしに羅馬全く之を殄滅せんこ  
 とを圖り殊更に責めて曰く汝の都城を毀ち悉く其兵器を羅馬に納むべし海岸を離  
 るること五里にして新地を開き悉く之に移るべしとカータゴ人其言を聞き憤怒に  
 堪えず國人皆都城に據り死生を一擧に決せんと欲して古今比類あらざる防禦の術  
 を盡し苦戦すること二年餘羅馬人城を破り遂に之に勝つ殘殺血を流すこと六日六  
 夜兵火消へざるもの十七日なり國人七十萬死を免るゝもの僅に五萬人又皆捕虜と  
 なり奴隸として賣らる爰に於てカータゴ全く滅亡せり

◎希臘の衰亡とマセドニヤ歴山大王

明治三十年十月十日  
 東京學士會院講演

今日も前會に續きて富強の國の衰亡せし説話なり以前に述べしが如く英雄豪傑の  
 所爲は省くべき積りなりしが歴山王の事に於ては余少しく説あれば之を演述する  
 ことせりマセドニヤ王歴山の事業は當時希臘の開化を擴張して古世界の歐亞諸  
 國の舊惡弊俗を洗滌し更に之に新面目を開かしめて以て廣大なる開化人民の邦城  
 を創立せんとするに在るが如し歴山の遠征する所マセドニヤを出て亞細亞阿非  
 利加は地中海の濱地より埃及のアレキサンドリヤに至り是より轉じて印度はヒマ  
 ラヤ山の下ペンジャフに至り是れより又印度河の海口に至しが其經營する所の邦城  
 は將さに一大文明國を現出して其國號も之を後世に傳へんとせしならんに歴山在  
 位十二年餘歳三十三にして死せしかば偉業も半途にして絶え國號も後世に傳はら  
 ず而して其經營せし地を計るにマセドニヤよりアレキサンドル迄二千哩又印度の  
 ペンジャフ迄三千哩ペンジャフより印度河の海口迄五百哩此海口よりアレキサンドル  
 迄二千五百哩なりいづれも大約のみ今假りに此疆域を歴山國とすマセドニヤは即  
 ち歴山國と其王の生地なり故に世代に従て之を希臘の次に述べ



希臘は歐羅巴の古國なり、學藝の道開化の源漸くに此民に起りて歐羅巴全洲に及びたり、太古には希臘の人民も野蠻の屬なりしが、土地の形勢半島多く、島嶼羅列し、海濱には埔頭港口少ならずして交通航海の利便四方に開けたりければ、埃及、ヒニシヤ、小亞細亞等の入茲に移住せし以來風俗始めて變じ、其見聞する所漸く廣く、其交通する所漸く遠きに及び、紀元前一千年の頃希臘人多く近隣の小亞細亞濱地に移り至りし時よりして、其貿易と航海のこと始て世に知られたり、此小亞細亞の希臘人殊に「ヨニセ」人種の希臘人に依りて其貿易愈々廣く行はれ、大にヒニシヤの貿易を衰微せしめたり、ヒニシヤ人の黒海多島海の商賣は希臘獨り之を擅にすることを得たり、ヨニセの都會十二個所の内最も繁盛なりしはミレチヌスとポセアなり、ミレチヌスの貿易はヒニシヤの都會チリュス及びカルタゴと相競ふに至る、其通商する所は廣く北方に通じ、プロボンチヌス即今のマルモラ海より黒海沿邊の諸國に及び、ミレチヌス人其海濱に於て大に殖民地を設く、セネカの説には七十五個所、ピリニユスの説には八十個所と云へり、其最も著名なる殖民地はポリステネス河口のオルピヤ、ドアン河口のアンウ半島、クリミヤのパンナカヘーム等の如し、小亞細亞北岸にてはシノ

ペ等なりシノベは高名なるシオセネスの生地なり

ミレチヌスの繁盛の時黒海の時黒海の一地を開設して通商に便す、此地をピサンチウムと名く、紀元前六百五十年神武天皇十一年の事なり、方今有名なるコンスタンチノープル是れなり

ポセアはミレチヌスに次で繁昌なるヨニセの都會なり、其貿易する所廣く地中海の濱地に及ぶ、ポセア人初め西班牙海濱のタルテシム及びガデスに至りて貿易の條約を結びたり、是れ希臘人の貿易に於て條約を結びし始めとす、又ポセア人カルタゴの艦人五十名の船を雇役し、之を以て貨物を運漕せり、是れ其貿易の爲め運漕船を用ひし始めなり

紀元前五百四十年安寧天皇九年ヘルシヤ王タイラスがリジイ國を亡し、又ポセアを攻圍す、都人多く城を逃れてカルリーの佛蘭西の舊名に移り、茲に交易の地を創立し名けてマスシリアと云ふ、即ち方今のマルセイユ是なり、マスシリアの近地にも多く其殖民地を開きたり、又海上に於て大に其威勢を振ひ曾てカルタゴと海戦し、悉くカルタゴの軍船を破りたり、後羅馬に服従し數百年の間常に平穩にして貿易の要區たり

希臘人民中「ドニセ」民族は阿非利加濱地の商賣を専らとし、其殖民地をシレネと稱す、

希臘の衰亡とマセドニア歴山大王



農業と商賣との地にして又其内地に結隊商旅を爲して繁昌せり  
 埃及王プサンメチキヌ希臘人の援助を得て王位に登りし後其港口を開きて希臘人の貿易に便す又埃及王アマシスの時市街ナウガラチスを興へて其貨物を貯藏する所とせり是れよりして希臘人の埃及に來るもの更に夥しかりしなり  
 小亞細亞希臘の都會の外本國及び島嶼に於ても亦都會多し皆貿易と航海とに有名なり特に雅典を極盛の地とす其海濱に三港あり此三港は雅典に於て尤も便利なり  
 一はパレリュス港一はミュニシヤ港一はビレウス港と云ふパレリュス、ミュニシヤの二港は船舶五十艘を容るべくビレウス港は四百艘を容るべし  
 是を以て雅典は年久しく海上の權威を振ひ其威勢希臘國中及びイオニ全島に於て之に及ぶものなし

特りコリントの貿易は雅典と優劣を競へり此地はコリント海灣の濱に在りてコリントの地峽よりサロニ灣に至り灣内にはセンスレーンの港あり其地形に於ては通商の便甚だ良し其商貨は技藝工作の諸品及び土産の物を以てせり

運送はコリント地峽の捷路を取りしが故に轉輸更に便利にして東西の百貨悉く茲に輻湊せり土人技藝を好み最も彫刻を巧にし繪畫を善くせり然るに其都人華美を好み奢靡に流れ大に風教頹敗せり

コリント人嘗て殖民地を設くるもの多し其盛昌の地と稱せしはコルシラ、ポチデア、シラキュセなり紀元前百四十六年開化天皇十二年カルタゴ滅亡の頃羅馬の大將ミンニウス都會コリントに亂入して其彫刻繪畫の名物を破壊し或は之を羅馬に送りしに由りて名器悉く亡失せり其後百年を経てジエリウス、シーザー此地を再興せしかど往時の隆盛には至らざりしなり

希臘の殖民地既に東方の各所に徧きを以て又地中海の濱地に於て殖民地を開きたり其著名なるものは西西里及び南伊太利の地にして其内の數部は富饒繁盛なること本國に頗頗し遂に南伊太利を以て大希臘と稱するに至れり

タレント、コロト、ロギリは貿易と航海とを以て人富み國榮えたり

西西里の東岸南岸は悉く希臘の殖民地となり其貿易盛行の都會をアギリテンチム、シラキュセとすアギリテンチムは富有にして榮華を極めたり其住人八十萬ありと云へり古哲エムベドクレス同胞なる都人に向ひ其驕奢の狀を語て曰く君等の家居を美麗且つ堅牢にすること永久生存する者の如くし君等の酒食を貪ること且夕に死亡する者の如くすとシラキュセはコリント人の殖民地たり其繁昌なる時は住民百二

希臘の衰亡とマセドニヤ歴山大王



十萬餘に至る、シラキエの權威隣邦に振ひ、西西里の希臘都會は皆之に屬せり、嘗てカルタゴと威勢を争ひ、雅典に抗敵するに至れり、然るに紀元前二百十二年、皇三元年終に羅馬の大將マルセルの爲めに攻め亡されたり

希臘國初の記傳も諸國太古の記の如くに太た逸然として虚誕信すべからざることを多し、蓋し希臘人は印度ゼルマン人種にして初め之を「ペラスコイ」と稱し、後「ヘルレネン」と稱せり、其希臘の名稱は後世に至りて羅馬人の命ずる所なりと云へり

紀元前千年以來希臘人の言語音調の殊異なるよりして自ら人種三様に分れたり、其一を「ヨニー人」と云ひ、其二を「ドリ人」と云ひ、其三を「エーオリ人」と云へりとなり、建國以來年久しく内訌打續き幾多の沿革を歴て漸く國內分立し或は舊慣に因りて王政となるものあり、或は共和政となるものあり、ドニセの「スバルタ王制」ヨニセの「雅典共和制」の如し、故に全國統一の主權制を缺きたり、是れ希臘立國の大缺典たりき

紀元前五百年の頃小亞細亞の希臘殖民地に於て波斯一統獨裁の政權と希臘の自由政體と衝突を生じ、終に兩國の一大戦争を起せり、初め波斯王「ダリウス」使を遣り希臘各州の水陸を問はしむ、テベ及び幾多の島嶼は「ダリウス」王の威力に服従せりと雖も、「スバルタ」雅典は大に之を拒み、「スバルタ」にては其使を捕へて之を深谷に投じ、雅典にては

之を井に投じたり、是に於て波斯は四年の間國力を竭して戦備を整へ、四十六個國の兵二百餘萬の大軍を擧げ之を征伐せんとして無數の陸軍無數の軍船を以て海陸より希臘に進攻せり、雅典「スバルタ」の同盟軍寡兵を以て陸に防ぎ、海に戦ひ、或は火を放ちて敵船を焼き、或は之を分捕し悉く敵の軍船を敗滅に至らしめ、陸も亦希臘の大捷となれり、波斯王「ダリウス」其將「マルドニウス」精兵三十萬を捨て國に逃れ歸るに至れり、此大戦敗より波斯は國運日に衰微し希臘は國運日に隆盛に赴けり

希臘は國初より全國一統の政體を立つること能はずして其人民協同一致の實を缺けることは上に述べたり、然るに偶々波斯の我を併せんとするを以て國難を救ふの必要上止むべからざるにより各々力を戮せ擧て外寇を掃除せり、然れども國難漸く去るに隨て舊習の軋轢又始まれり、殊に外寇以來内國の主權自ら雅典に移りしかば「スバルタ」人嫉妬心を起し双方和すべからざる仇敵となり、屢々波斯の外援を乞ふて互に權勢を争ふに至れり

茲に又「コリント」と其殖民地なる「コルシラ」と海上勢威の爭論ありて、「コルシラ」は雅典の援助を頼み、「コリント」は「スバルタ」の救を乞へり、是に於て希臘の全國民二黨に割據して戦争を起すに至る是れ「ドニセ」民族と「ヨニセ」民族との内訌なり、即ち寡人政と民



政との争亂なり

此戦争互に勝敗ありし後スバルタの勝利となりて其令する所に従ひ雅典は城壁を破壊せられスバルタの制に則り三十人の執政官を置くに至れり抑々雅典人の元氣漸く衰へたるは其徴候一ならず富貴者の金銭を以て貧民を賑はし公共の宴會を設けたり又法令を出して云く國庫の剩餘金は悉く人民に配分すべし他に之を使用するを許さずと又其最も禍害となりしは軍役の次第に雇兵に代るの習慣を馴致せるより愛國の精神は漸々に消耗して淫慾に耽り正義を缺き賄賂公行等種々惡風俗に流れたり

又此時一派の學風行はれ辯論を闘はし政畧を談ずるを専らとす所謂ソピスト派にして其學徒四方に遊説し己れの學業を以て金銭を貪り富貴榮華を求むる私欲の用に供せり當時ソクラテスは世人の行ふ所善と惡との差別を自ら思考せしめんと欲して其證據を示し之を悟らしめんとことを務めたりしが時恰もソピスト派と黑白是非の争論となれりソクラテスは彼等に問を設けて答へしめ其答辯の誤謬を示し以て彼等を閉口せしめたり然るにソクラテスの唱ふる所の説は雅典人の信仰する諸神を蔑にし其少年を腐敗ならしむる異説なりと裁決を下して毒杯の刑に處し七十

歳の大儒も其學説の衝突の爲めに犠牲となれり

スバルタの武威能く希臘の主權を恢復せしと雖も其主權を使用するに大に濫用せり雅典は城市に自由なる貿易の利益を興さしめられたれどもスバルタは然らず寡人の苛政を施して國人の恨を招き其專權を削減せらるゝに至れり

リキュルクスの國法既に廢れて風俗亂れ娛樂に耽り華奢に流れ淫風醜汚の奴隸となりスバルタも雅典の如く共に風俗壞敗せり

此の如くスバルタ雅典共に衰運に向ひしもスバルタは尙ほ希臘の主權を擁せしかば希臘國人大に之を憤りテベの民族兵力を以て希臘の主權を其掌握に歸せんとせり波斯王とスバルタ雅典とは其内訌に於て互に其援助を乞ひければ此時又スバルタ波斯の加勢を得テベの同盟を潰散せしめ其主權を回復せしがテベの共和黨の逃れて雅典に來るもの復た起りスバルタの羈絆を脱して一時希臘の主權を握れり爾來希臘國內の不和内擾息まざりし中に一の大獄起れりテベとテッサリーの戦争中ポーセ人がブルビー大寺の財寶を取りて兵隊を募りしに因るテベ之を裁決するの主權あるも力及ばざるを以て其舊好あるマセドニア王ヒリプスに約し其助力を以て之を治むヒリプス王其約に背き兵を以てポーセの要所を取り竊かに希臘獨立



の主權を横奪せんとす、希臘人之を悟るものなし、雅典の有名なる愛國者デモステネス獨り其陰謀を看破し、智を竭し辯を盡し辛うじてテベと雅典の同盟を結ばしめ、之を救はんとせしも同盟の軍敗るゝに及びて希臘の主權全くマセドニヤ王に歸し、希臘の獨立茲に亡びたり

マセドニヤ

マセドニヤと稱せしは古の大史家ヘドロテウスの世に歴史家の時に始まれり、其國民は各種の民族にして野蠻未開の民多しと雖も、古來より希臘の習慣風俗大に行はれたる地にして希臘の所謂英雄時代のテメニウスの子孫始めて此國の王となりしは、正に紀元前八百年代の頃なりしが、五百十三年より四百七十九年に至る間は波斯の領屬たりき、其後紀元前三百六十年に至りて國王アミンタスの子ヒリプス王位を繼げり、是より先にマセドニヤに於て王位の爭論起りしが、其仲裁者たるペロピアスの裁決に因りてヒリプスは希臘のテベに送られ、蒙族エバニモンタスの家に客たるに至りしが、此時テベの新軍法を修め後之を以て自國の軍隊を改革せりと云ふ、ヒリプス幼にして大志あり、王位に就くの始め既にマセドニヤを希臘に合併して其主權を掌握せんとするの大望を懷き、近隣の敵國を征服して内顧の憂を除き、而して事を希臘に

構ふに至れり、既にして雅典の主權の及ぶ所の城市は悉く攻陥し、次で其最も勁敵なるオリンテウスを攻圍するに至れり、此時に方り希臘の運命既にヒリプス王の掌中に在りと雖も希臘の國民殆んど明旨の如く一人として累卵の危きを知るの明なかりし、此時雅典に一男子あり、デモステネスと稱す、當時第一流の能辯家にして其辯論の巧妙なりしは後世の模範とする所なり、特に其有名なりしは、ヒリプス、オリンテウスの辯論とせり

デモステネス天賦の雄辯を振ひ、ヒリプス王の謀畧を看破して之を無効に歸せしめんと力めたりしも、其志を遂ぐるに能はず、惟纔に希臘人をしてオリンテウスの危急を救ふの援兵を發せしむるまでの効を奏せしも、其軍隊は雇兵にして戰鬥に用ふるに足らざるより終に城門を開きて降るの止むを得ざるに至れり、此に於てヒリプスの軍は益々勢ひを得て諸城市を降し、又スバルタを攻めて之を窮地に陥れたり、此時に當りてデモステネス獨り大義を負ひ神力を竭して父母の國を救はんとし、て救ふこと能はずと雖も、其義氣益々奮ひ終局の功を期し、遂に雅典をして其名譽の戦勝を得るに至らしめたりと云ふ

此軍畢りて後ヒリプス王は波斯征伐の大舉を決し、希臘軍の主將として戦功の金冠

希臘の衰亡とマセドニヤ歴山大王



を戴かんとする希望中に死期の其身に迫まることあるを悟るを得ざりしなり、王出陣の大祭に會せんとするの途中刺客の害に遭ひ終に其殺す所となれり、此舉波斯の使囑に因ると云ひ、或は王の妻オリンピアスの王を怨みし結果なりとも云へり、其孰れか眞なるを知らず

ヒリプス王死して其子アレキサンドル年二十にして位を繼げり、即ち世に歴山大王と稱するものは是れなり、歴山歎じて曰く父は吾の爲すべき事の何にもものをも遺さざりしと

歴山は常に耐忍なる父よりも短氣なる母オリンピアスを尊敬せりと、其幼時より哲學者アリストテレスに教育せられ、其尤も愛讀せしものはホメリユスの詩書なりと云ふ

當時希臘の開化大に發達して東西の民族を混和し、正に統一の大國民を創設するの時勢到來せり、歴山の位に即くや、コリントに於て希臘の使節を招集して會盟を爲し、自ら父王の遺業を紹きて波斯征討軍の主將たるに至れり、是に於て隣國の蠻民を伐て之を降し、又王權に背きし、ダラシ、イルリシの反黨を征して平定せり

其明年の春歴山年齢方に二十二波斯發向の軍備を爲し老將アンチパテルをして自

國マセドニヤを守らしめ、自ら精練の將勇敢の兵三萬五千を引率してヘルレスポンド(今のダルダネルの海峡)を越えて敵國に侵入し、トロイの地に至りて希臘の古跡を追懐し、武戲を催し犠牲を供して軍神を祭り、直ちに敵軍とガラキユスの野に戦へり、歴山身を挺して敵に當り大に波斯の軍を破りしかば、此一役に於て小亞細亞の地大半王の領有となれり、其西南の海岸に戍兵を置き、敵艦の來襲に備へ、自ら兵を督してペリジの舊都ゴルジウムに至れり、此地はエウフラート河邊を扼する要地とす

因に云ふ、此都城に古今有名なる寶物あり、并は舊王の車に附したる紐にして木皮を以て製したるものにて、此紐を作りし始めと終りの何の所にあるや殆んど知るべからず、神傳に云ふ、此紐を解くものは亞細亞の主たるべしと、人あり之を歴山に献ず、王熟々之を見て其始まりし所と終りし所とを究むれども知るを得ざるを以て急に刀を抜き之を切解し呼で曰く、吾亞細亞の主たるべしと、歴山時に年二十三歳なり

王の軍ドウリュス峽を過ぎてシドニユ河に至る王寒水に浴せし故を以て忽ち病めり、此時既に波斯王ダリュスの大軍は陣をエウフラート河上の地に敷けり、王の左右深く之を憂へたりしが、幸に侍醫ヒリプスの一劑能く其病を治せしを以て王力めて軍を發



し波斯王六十萬の大軍と對陣せり、時に波斯の軍我が背後に來るを見て急に軍を旋らして之をイスキススの峽路に攻め大に之を敗りダリュス王を走らして追及せず、惟其母及妻子を捕虜と爲し、厚く之を待遇せしと云ふ

是に於て歴山は沿海の諸國を服従せしめんと欲してシイリー、パレスチナ、ヒニシヤ、埃及等に發向するに際し、猶太國に對しては眞神に奉物を供し以て之を優遇し、ヒニシヤの新都會たるナリユス人王に抗敵せしを以て之が討滅に従事すること七箇月にして討平し遂に埃及に至れり、埃及人王を歡迎し服従せしを以てパリュス島の近傍に於て一地を選び一は世界貿易の中央互市場と爲し、一は東西の文學を互に交換せしむる學問の首座と爲し、名けてアレキサンドリヤと稱せり、時に王二十五歳なり、歴山の埃及に在るや偶々波斯國の和議至る、王之を却けて納れざりしかば、老将バルメニオ曰く、吾れ歴山ならんには之を納るべしと、時に王曰く、吾れ亦バルメニオならんにはと答へたりしと、歴山埃及を去りて又亞細亞に向ふて發しアッシリイのアルベラの地に於て波斯百萬の大軍と會戦し大に敵軍を敗れり、ダリュス王又逃れてエクパナに走りしが、地方の大守ベスキスの爲めに弑せらるゝに至れり、歴山王マセドニアの兵士に命じて波斯の都會バビロン、シユサ、ペルセポリ、エクパタナ

等を守らしめ、自ら波斯東北の各州を巡視してバクチリーに至り、太守ベスキスを捕へて其主君を弑せし大罪を責めて死刑に處じ、留ること二年餘希臘風の市街を設け、其風俗を移し、商賣交通の道を開けり

今や廣大の境域は歴山王の領有に歸し、歐亞兩洲に跨れる首權者として人民の崇敬を受くと雖も、王の志遠大にして之に満足することなく、尙ほ印度を畧して亞細亞洲の主たらんと欲し、遂に遠征の兵を起して征路をカブール河の沿岸に取り、沿途の國主抗するものあれば討て之を降し、降る者は之と相和して希臘の文化風俗を移植するを務めたり、既にしてアトックに至りて印度河を渡り、ベンジャフに向ふ、ベンジャフはヒマラヤ山下の廣地にして河川五流に分れ合して上印度河に入る所なり、此地に又新アレキサンドリヤの都會を創設して印度統轄の根據地とし併せて交通運輸の便を開くに至れり

歴山の印度に入るや、至る所の土地豊饒にして無盡の寶富あるを知り印度を獲て亞細亞に大主たらんと志望益々熾んに、ベンジャフを越え印度河の五流を渡り其東方の大陸を經、恒河に至り海路を開くの準備を爲さんことを企てたり、王は常に軍隊の議決を容るゝを以て喜びと爲し、之を喜ぶの外何物をも王を喜ばしむるもの更にな



かりき、然るに歴山王の懸軍萬里遠征を圖るの念窮極なきを見て、將士竊かに之を憂ひ、其軍を還へさんことを請へり、是に因りて王將士を集め、軍隊の決議を易へんことを求めて曰く、恒河と東海は此處より遠きにあらず、カスピヤン海は印度灣と相連り、印度灣は波斯灣と相接す當時の地學書に此境域に至れば遠征の事成就して軍隊の任も亦遂ぐべし、即ち誓て曰く、軍隊の此任務を遂ぐるに於ては、其賞として富且つ貴きに至るべしと、而して王は其決答の如何を待てり、然れども一人の之に答ふるもの無く皆默然たり、時にゼニヌなる一士人あり、軍戦中に老て既に白頭翁たり、王に告げて曰く、王と共に出陣せし希臘人マセドニヤ人の今に存する者は僅々にして、テスサリイ人は不平を懷きて已に故郷に歸れり、幾千の希臘人は新開の城市を守り、其幾許の人は疵傷を負ふて病蔭に呻吟せり、其多數の戰士は或は戦場に斃れ或は病に死し又は餓死する等其幾何なるを知るべからず、而して幸に百戦の苦難を凌ぎて生殘れる者、人の情として父母の國に歸り、其從軍の名譽と勳功を顯すことを願はざるものあらんや、王自らも王や時來れり、王の劔善く赫々の武功を奏し、廣大の威光を輝かせり、王君父の家に歸り又更に少壯勇敢の軍を擧げて再び遠征を謀るも亦遲きにあらざるべしと、時に軍中噤默敢て一語の聲を發するものなく、潜然として歎息するもの

あるは、老翁の言に同意を表するの徴として見るべきなり、王快々として不快の色あり、忽ち其集會を解散し次日又其集會を命じ、嚴然として曰く、吾既に遠征を決す、吾に従はんと欲するものあらん、其欲せざるものは去れ、且つ言へ汝等汝の王を敵地に捨つと、言終りて「テント」に入り出で來らざることを三日、是れ王の決心動かすべからざるを示せるなり、而して王は兵士の心情移り易き常習あるを知りて、竊に軍隊の意を變ずることあらんを待つものゝ如し、然るに王の心計齟齬して寸効なく、軍中前日より一層靜肅にして、多少王の意に戻るを感慨する者あれども、王の満足を表すべき寸分の驗をも見へざりける、第四日目に至りて王河川を渡る準備を爲さんとして、例に依り神前に犠牲を供して前兆を占ひしに、其兆良ならずと、之に因り王は軍隊の意に従はざるも、神の意には従はざるべからざるものゝ如くに呼んで曰く、吾れ軍を還すべしと、之を聞くや、忻喜の聲軍中に響けり、或は落涙して悦ぶものあり、或は王の「テント」に走りて感謝して曰く、王は王の軍隊にのみ王を勝たしめたりと、是に於て歴山王高く壇を築きて遠征の幾許の遠きに達せしかを示し、又神祭を行ひて之を祝し、軍を還して再びヒダスベスの市街に至れり、此市街は前に新開せし所にして、是より印度大河を下り、大海に出るの支度を爲さんが爲めに、カリールサイブラスヒニシヤ等の船



工に命じ軍船二千餘艘を作らしめ、船師ネールカスを擧げて水師の總督とし、自ら一隊の兵を率ゐて船に乗り、金杯を捧げて神酒を大河に投じ、水路の安全を祈り、陸路の諸隊はヒダスベスの河岸に沿ふて進發せり。此擧印度の民族をして最も驚愕せしめしは、軍船の夥しき數なりしと、發程五日にしてアセシネスとヒダスベスとの合流の處に達し、水路の通過甚だ危険にして、損害を蒙ふること多く、加ふるに沿道の勁敵、マルレルス民族の遮るに會し、之と戰鬪を開き、其急なるに當り、王自ら飛梯より敵中に飛び入りて戦ひ之れに勝つことを得たりしが、王は第一の先登者なりし、此戰に於て歴山大傷を蒙り、一時生命の危きに瀕し、一軍爲めに色を失ひしも、幸に回生の運に向へり、凡そ歴山は危難起れば躬自ら先づ之に當り、飢渴至れば人の耐へざるを忍ぶ、何に限らず人に先んじて事を爲すの人なりと云ふ、歴山至る所の地に於て要害を察し、堅寨を造りて各州の聯絡に便するを勉めたり。パタラの地は印度河の分れて二大支流となる所にして、其要地たるを察し、一港を開きて水陸交通の要地とせり、而して此二支流の何れより下りて大海に至るを便利と爲すやを試みんと欲し、自ら一船に乗り幾多の危険を冒して、左右の支流を搜りしに、干満に激變ある異狀の現象を知り、以て水路の難易を察し、漸にして大河を下り始めて渺茫たる大海に達するを得たり、此

行ヒダスベス河の發程より印度河口に至る迄九箇月餘を費せしが、茲に再び神祭を行ひ、王自ら犠牲を供し、金杯に酒を盛りて之を海中に投じ、前途航海の安全を祈りしとなり

是に於て軍船隊の指令をニールカスに命じ、海濱に沿ふて波斯灣に入り、エッフラートとチグリスの河口に達するを目的として航行せしめたり、當時此航海は最も至難の任なりしと云ふ

歴山王は船隊の糧食等缺乏の物品を給與せんが爲めに、故らに陸地を取り、之と相接近して路を取れり、其行路の南方はグドロシヤなる砂漠無人の境に入るの止むを得ざるに至り、王をして艱難の域に陥れしのみならず、船隊給與の目的を失ひ併せて人命を失ふこと實に夥しく、出師以來難中の至難なる行軍なりし、今其一斑を序せん、軍隊の砂漠中に来る其一步は一步に蹠を没し、熱砂を踏み、各々其足の燒けるが如きを覺え、軍用の物件、食糧及び病者を載する所の車は、車輪砂中に没して、軍隊の繼で進むこと能はざるものあれば、荷を負ふの獸類路傍に斃れたるあり、獸類の斃死は屠りて、兵士の飢餓に充つるも、水の缺乏には更に困難を極めたり、疲勞して倒れるもの再び起きて、同輩の跡を追ふも再び倒れて、砂塵の中に埋没する等實に悽慘を窮めたり、此



困厄の中に在るも歴山王は徒歩にて常に軍隊を督し兵士を奨励せり、或時王の甚だ  
 渴に苦むを見て兵士些少の濁水を搜し得て王に進めしに、王大に悦び厚く謝し、軍隊  
 の眼前に於て其水を地上に撒布しければ、兵士悉く水を得て渴を凌ぎし思ひを爲し、  
 軍隊之が爲に奮起せしとなり

此苦難の行軍六十日にして漸くにゲドロシヤの一都會に到着せしに、近國の國主等よ  
 り夥しく食品等の贈物あるに會し、茲に始めて軍隊の勞憊を養ひ、之をして蘇生の思  
 ひを得しめたりと、既にして歴山は此地を發しカラマニヤに至り其海濱に於て船隊  
 總督ニトルカスの來着に會し、其海路の危険困難の狀を聞けり、初め歴山王の印度遠  
 征に當りて波斯の執政大臣等おもへらく、歴山必ず客地に死なんと、故を以て政法を  
 紊だし、暴虐不仁貪欲を逞ふするのみならず、甚しきは先王タイラスの墳墓を發きて  
 其金製の柩を奪ふに至れり、王大に怒り再び之を修繕せしめ、其貪婪不厭の執政官等  
 を捕へて死刑に處し、大に黜陟を行ひ國內の平治を圖りし後、大都會なるシサの地に  
 至れり

歴山是に於て其宿志を行はんと欲し、東西の民族を互に親和せしめんには、マセドニ  
 ヤ諸邦の男子と波斯の女子との結婚を行ふに在りとし、王自ら首としてダリュス王の

長女を娶り、將帥八十餘人には波斯名族の貴女と婚姻せしめ、又將卒の波斯の婦女と  
 婚する者には多く財寶を與へて奨励せしを以て其婚姻者の數一萬餘人に及びしと  
 云ふ、其他領内に於て壯兵三萬人を募集して之をマセドニヤの軍制に訓練し、招集し  
 て曰く、今や統一の下にありて勝者と敗者との別あるとなし、敗者は勝者の奴隷として  
慣皆同等にして同一なりと懇諭し各地に分營せしめ、又波斯の名族を撰拔して王  
 の左右及び議官に任用し、以て厚薄なきの意を明にせり、又一方に於ては通商の關係  
 よりしてカスピヤン海及び黒海と印度海との接續を探知せんとして船舶を造り、更  
 に亞刺比亞を取りて埃及印度波斯灣との航海貿易を開通せんと欲し、鉅費を散じて  
 ヒニシヤ及び地中海濱の地より船工水夫の募集を計り、王自ら舵を操りて、エウフラ  
 ート河の流域を極め、水勢の緩急を窺ひ沿岸の沼澤溝渠等に出入り、瘴霧を冒して其  
 地形を探知せしが、後ちバビロンに至り俄然病に罹り、年三十三在位十二年八箇月に  
 して殞落せり、王の將に暎せんとするに臨み、老將ブルジカスに指環の國璽を授けて  
 後事を托せり、是に於てブルジカス王の幼兒を擁立し、統一の大事を謀議して將帥中  
 ブトレメッスを埃及にアンチバタルをマセドニヤにリシマガスをタラシに、アンチ  
 ゴニススをペリジに太守たらしめ、以て附托の任を完ふせんと圖りしも、後太守アンチ



ゴニウス獨り王たらんと陰謀を企てしより、太守互に覇權を争ひ内訌を生じ終に東西内亂並び起りて王家は只其玩弄の具となり、王家亦骨肉の禍を醸し後嗣終に絶滅して王國マセドニヤ遂に亡びたり

●羅馬の盛衰

明治三十二年四月十七日及同年十一月十三日東京學士會院講演

歴史は其時代の精神の働きを記述するものと思ふ、凡そ人間同類の精神は、人間以上に超絶すること能はずして、其働きは定りたる範圍あるが如くにして、今世東洋の時勢の古羅馬の時代に稍々相ひ似たる所あるが如きは、是れ所謂「ツァイト、ガイスト」の發動循環するに因るか、今日の演説は羅馬の盛時に至る所以の起原なり

史の傳ふる所に據れば、古の伊太利亞民族は原と印度日爾曼人種なりしが、此人種分れて「エトリユセ人」といひ、「サベネ人」といひ、「サムニート人」といひ、「羅匈人」といふ、世に所謂羅馬人なるものは即ち此の羅匈人とサベネ人となり

羅馬初代のごとは遠く希臘の古傳に淵源し、「トロイ」の戦争は羅馬の成立に關係あり「トロイ」人「アネアス」なる者諸國に流浪せし後羅匈に寄寓して茲に初て土地を占領し、其子「アスガニウス」に至りて、「アルパロンカ」といへる一市城を創立し、子孫相繼で王政を

行へり、王「ニユミトル」の女に二子あり、兄を「ロミュリウス」といひ、弟を「ロミュス」といふ、此二人が祖父「ニユミトル」に請ふて、「バラテン」丘上に一市城を建て羅馬と名づけたりしが、是ぞ羅馬の創建なり、其際兄弟不和を生じ、弟「ロミュス」は兄「ロミュリウス」に殺されたり

史に羅馬創立の年紀を紀元前七百五十二年四月二十一日と記せり、是れ羅馬の學者「ハアロー」の説に據れるなり

抑々羅馬が王政の初より共和政治の始に至るまで、凡そ二百五十餘年の間に於ける、其事跡制度の詳なることは得て考ふべからず、草昧の世史の記載備はらず、其傳ふる所往々稗史小説に類するあるは、何れの國も皆同じきことなり

羅馬は「ロミュリウス」王より共和制を経て、「アウギユスチウス」帝に至るまで、七百有餘年の間には國民を統一にし、外は他邦を攻伐し、兵力充備、民物富庶、其隆盛を極めしこと千年以内の歲月を以て至るべきの業にあらず、然るに羅馬が七百餘年を以て此の鴻業を成就せしめたること、今より之を想察するに、其進歩の速度蓋し非常のものなりしならん、當時世界に國を建てるもの、其兵を被ふらざるもの、幾んど稀なりしといふ、故に云ふ「たゞ羅馬の史を閱せば、則人間の歴史を悉するに足ると



羅馬人は内亂あるときは外に和して内を治め、内治まれば復外を攻む、千辛萬苦、智力を奮ひ、危險を冒し、地を畧し、國を拓らさば、以て富饒を求め、四隣を威嚇し、其國基をして永く磐石の堅きが如くならしめんと圖るものゝ如し。

羅馬の史家フロリユス其數百年の事迹に於て譬を取て之を叙述して曰く、羅馬の形勢の漸次に推遷するを以て、人身生涯の老少盛衰に譬ふべし、國初王政の時凡そ二百年の間は僅に一城を保ちて隣國と攻戰するに過ぎず、是れ猶人の幼時筋骨の脆弱なるが如し、其次は初代の統領王政を革めて共和政治をなすの始ブルチユス及びコルラチユニスより統領コウシユス及びプウピウウスに至る迄、又二百五十年、其間氣運漸く旺かんにして、伊太利全國を攻めて之を押領し、國力兵威俱に盛なり、是れ猶少壯の時英氣勃焉たるが如し、其時よりシーザル、アウギユスチユスに至る迄、二百年の間の共和政府は、世界を以て貢獻附庸の屬地と爲したり、アウギユスチユス又共和政府を革めて帝制を立つ、是れ人身強壯體格心神の一定するに譬ふべし、帝の後子フロリユス自から言ふの時代まで幾んど百餘年を閱したり、帝位相繼ひて不肖無能の主多く、國威漸く衰へ將に滅びんとせしを、帝タラヤニユスに至り、國勢復た振ひ、幾んど前時の盛なるに比す、然れども其後終に政綱弛み、武威衰へ、萎靡振はず、是れ猶人身の老境に及べる

が如しとなり

羅馬王制の時代に於て、既に三等の民族あり、一に曰く豪族、二に曰く隸族、三に曰く農族、是なり、共和政の時に至りて、豪族と農族との争起る、是に由て人心奮起し、遂に羅馬が強大を致すの基を成せり。

豪族は初め羅馬の近隣の住民なりしが、羅馬城の創立に與かりて功ありしかば、政事の重職に任じ、兼て法教の事をも掌ることゝはなりぬ、而して議會を設けて國事を協定するは、特に豪族の專任とせり、隸族は建都の際、豪族に服従して之れを助力せし者なり、農族は全く此の二族とは殊別なる不羈の人民にして、王政の頃より漸次に他より移住し來るものなり、初め農族をば制外のものとして、政事に預ることを許さず、又民會に合議の權をも與へず、軍に軍役の義務を課し、地租を出すの責のみを負はせたり。

羅馬初代の王は、首領にして法を制し、政を行ふの權ありと雖、其下に元老官ありて之に參與し、權衡を取て王をして獨り政權を擅にするを得ざらしむ、元老は皆豪族より選任す、其人員は三百名にして、民會は元老の所屬たりしといふ。

王タルキユスに至りて、擅に政權を振ひ、元老を削減し、會議を催すこと稀にして、遂に



之を廢したり、又豪族の財産を横奪し、或は之を放逐し、或は之を死刑に處し、又農族をも抑壓して王家の奴隸と爲す等、暴虐の所爲甚しかりければ、之が爲に内亂破裂し、終に王家滅亡の禍となり、王族は盡く境外に放逐せられたり。

内亂の首謀は、豪族プエルチユス及びコルラチユス等にて、王政既に廢せられし後は、豪族の威權獨り盛にして、羅馬を以て國會を開き、各部の長官を選任し、法を立て和を議し、戦を決し、謀叛を裁判する首府と定めたり。

是に於て先づ統領を擧て政事を執らしむ、統領は二名にして、毎年之を豪族中より選舉す、元老は従前の如く三百名に復し、一に統領の選任するものとす。

元老は國會と立法との權を分擔し、國幣及び外交の事を掌れり、是今より二千五百年前の事にして、共和政治の始とす、此の時に當て、逐王タルキユス竊に王政を恢復せんと謀り、隣國と約し羅馬と戦争を起せしが、事成らずして、王は客地に廢死せり、然れどもエトリユリーのボルセナ王との軍止まずして、羅馬府甚だ危く、殆んど敵手に陥るらんとせしに、茲に二人の勇士ありて、其危難を救ひたり、其一人をコクレスといひ、一にして、猛勇無雙なり、他の一人をシユレウスといふ、左臂あれど右臂なく、亦豪膽不敵の士なり、此の一眼一臂の兩雄俱に敵軍を撃ち卻け、終に之を存せしかば、其勳功は

永く羅馬の救護者として名聲を世に傳へしとなん

當時羅馬に於て無限の威權なるものゝ必用を感知し、是に於て首權者一名を擧て、非常の時軍事を總裁せしめんことを議し、其期を一年と定め、統領中の一名を選びて之に任す、其選任は元老官の職事とす、是れ羅馬に於て首權者を任用せし始にして、今より二千五百年前の頃なりき。

羅馬人一小區の地より起り、専ら武力を用ひて伊太利人の土地を押領し、之を三分して、其一を以て農族を移住せしめ、之を國有の地と爲し、農族をして之が防禦の義務を負はしめたり、其二分の地も亦國有と爲し、幾許の財を納るゝ者は之を所有し得るの法律を定め、特に豪族のみに許したり、若し其地を耕作すれば、年毎に其收穫十分一の租を納めしむ、豪族は又之を農族に耕さしめて、其收穫を收む。

羅馬が隣國との軍戦止むことなく、地を廣むること愈多く、豪族これを以て大に富めり、豪族の富に従ひ、農族は愈々窮せり、是れ農族は行軍征伐の爲に耕作を營むこと能はず、而るに納租の約束嚴にして、租税は平時の如く徵集せらるゝに由て貧困なる農族は盡く富有なる豪族の負債者となる、既に負債者たる後、若し期限に至り怠納すれば、定法に據りて債主の奴隸となり、苦役に服従せざるべからず、此時前王家再興の憂



も去りければ、豪族の抑壓愈甚しく、農族は終に堪ふる能はず、是に因て羅馬に農族と豪族との争亂起るに至る、此の争亂よりして羅馬の法制に大に改革を促かしたり、農族は頻りに軍役を拒み、負債の重荷を輕減せんことを訴ふるにより、之を平和に歸せしめんと謀り、約條を立てしかど、數々其實行を見ざるより、再び虚約に欺かれんことを恐れ、農族皆意を決して誓て曰く、我等の重荷を輕減せず、又我等の利害を共にする我が總代を許すにあらざれば、我等は羅馬を去て復た歸らずと、是に於て民會總代の制を許すに至れり、是れ紀元前四百九十四年の頃のことなり

民會總代は統領の暴政に對し、人民を保護し、自己の義を害せざるを主張し、妄に農族を召募し、軍役を課するを拒絶して止まず、遂に總代を舉げて軍隊會議に參與することを得しめたり

農族此の第一の資格を得てより、始は二人を舉て會議に列せしめしが、後五人となり、更に増して十人となしたり、既に此の第一の資格ある上は、第二の資格自から農族に歸せり、所謂第二の資格は即ち否決權にして、農族は是を以て統領の決議を否み、之を無効ならしむることを得ると雖、民會の總決議にあらざれば、否決の効なきものと定めたり

民會制定の後三年にして、農族又裁判權を分任するを得るに至りし時、羅馬に饑饉ありしかば、統領相議して西々利より穀物を輸入せしむるに及んで、豪族中勳功名望あるマルキウス建議して曰く、羅馬人にして民會を廢するに於ては、此の穀物を人民に分與すべしと、農族之を民會に訴へしかば、是に於て民會を開き、其罪を裁判して、マルキウスを其仇國に放逐したり、是れ紀元前四百九十一年の頃なり

同じく六十三年に至りて、農族も亦豪族と均しく國民たるの權利を得んことを議す、民會の一員コレンチウスなるもの豪族を攻撃して論じて曰く、羅馬には曾て明文の法律なく、諸事總て慣例に安んじ、豪族のみ獨り法官となり、法律家たるの故を以て、兩族が訴訟を構ふるの日、法官は肆に裁判を左右し、農族は毎に恨を呑み冤を受けざるなし、是れ苦痛に堪へざる所なり、願くは明文の法律を制定せんことを望むと、其爭論久しく決せざりしが、豪族は終に屈し之を認可するに及んで、元老相議して三名の士を選びて、雅典に遣はし希臘の法典を調査せしむ、是れ紀元前四百五十四年のことなり、後三年を経て彼の派遣の三名羅馬に歸來りしかば、同四百五十一年に於て、更に十名の委員を選び、新法を編成せしめ、又兼て政務を委托し、其間統領と民會とを中止したり、是れ羅馬に於て十官が政權の握るの始なり、爾來豪族と農族と幾分か權利の



同等を得ると雖も、國政の權に至ては猶全く豪族の有する所たり、其婚姻の若きも従前より兩族間に於て之を結ぶを許さざりし制ありて新法に於ても未だ此城壁を撤去すること能はざりき

新法既に成りしかば、民會の認可を経て之を銅版十二枚に彫刻せり、是れ羅馬の民法及び刑法の基礎あり

新成立法の事業成就しけれども、十官は猶其職を辭せず、依然として政權を私せしかば、茲に一揆の騷動起り、干戈を以て之を黜くこととはなりぬ

此の一揆の騷動を起したる原因の一は、十官執政中の首腦として、專制の非望を懷きしアピウスなるものありて、農族ビルギユスに一人の美女ありけるを、姦計を以て欺き、賺かして之を奪ひけるに其父ビルギユス之を取返さんと謀りしも、百計盡きて如何ともするよしなければ、終に羅馬固有の義勇心を奮ひ、我が愛子を一刀の下に殺害し、血刀を提さば、血屍を負ふて群民の前に至り、アピウスが暴逆の罪を訴へけるに群民大に憤激し、十官の權職を褫ひ、之を放逐の刑に處し、アピウスをば獄に投じ、終に獄中に死せしめしといふ

後紀元前四百四十五年に至りて、民會議員カニジウスの婚姻法案を議決して、農族と

豪族との結婚を許せり、又警察官を置き、其二員は必ず民會の選舉するものとし、統領に缺員あるときは、之を兼務せしむ

監察の職權は、五年毎に羅馬人民の員數を調査し、各自の財産を算定し、又其風俗品行をも監視し、若し官員にして、其面目名譽に係る不正不義の行あるものは、之を貶黜し、其國民たるの資格を褫奪せしむ、初め監察官の選舉は、五年毎に行ひしが、後に至りて五年半に改め、半年の猶豫を與へ、後任者の撰擇を鄭重ならしめたり

紀元前三百七十七年に至りて、民會議員なるリシニウスとセキスタユスの二名、農族資格の事に就て改革を合議し、三箇條の法律議題を定めて、之を民會に要求す、其一に曰く、統領の一員は、之を農族より擧げざるべからず、其二に曰く、羅馬の人民は國有の地に於て五百ジュグラ、大凡今の百三十町餘以上の耕地を所有すべからず、其三に曰く、農族が從來の負債は、既に拂たる利息の高を積算して元金を消却すべしと、此討論十年に涉りし後決定せしかば、之をリシニウスの法律と稱すととなり、茲に尙爭論の遺れるものは、即ち最上の裁判權なり、從來此の職權を以て、豪族の專有とせしを、紀元前二百八十七年に至り、爭論の末竟に之を統領の手より分離せしめ、農族又此の最上裁判官たるの資格を得、爰に總て國務の職に就くの官途を開くに至る、是に於て國法上、



族類の差別全く廢り、皆羅馬平等の人民とはなれり、初め農族の羅馬を退去せんと欲せしは、紀元前四百九十四年のことなりしが、此に至るまで二百七年の間なり、其間外は隣邦の民族と戦ひ内は兩族互に、法律を論議し職權を争ひ、騷擾止むことなかりしが農族終に勝を得て、平等人民たるの地位を占むるに至れり、此の二百餘年間に於て、羅馬人能く國難に堪へ剛毅の氣象を養ひしにより、偉大なる人物を輩出せしめ、遂に羅馬大共和國の富強を致せり

此の國內紛争の際に當りて、外はエトリウリ國等と戦ふて寧日なきにより更に戦鬪力を増し、一舉して之を討滅し、以て國內の平和を致さんことを謀り、總統領を選擧して之を任じたり、羅馬人の軍戦は、毎に冬天を避けて夏季を常とせしが、エトリウリ一の都城ビージの戦は、冬陣を張り、寒凍を犯かして激戦し終に之を降し、繼で諸市城を伐て、盡く之を平げたれば、エトリウリ國は羅馬の所領となる、時に總統領カミリウスが戦捷の分捕品をば私したる罪ありとし、民會の議決を以て追放せられたり、此れ紀元前四百五年より同三百九十六年まで十年間の戦なり

其後五年にして、從來、上伊太利亞に來住せし、セナ族のカルリ人、兵を起して市城クリウシムを攻めしかば、クリウシムは潜に援を羅馬に乞へり、會々クリウシム陣中より和を乞はん爲め、羅馬人三人を使として、カルリ一の陣に遣はし、に、カルリ人羅馬の之を助くるを知り、怒て和議を聽かず、更に軍を進めて羅馬に向ふ、チペル河邊のアルリカに於て、兩軍互に雌雄を決せんとして戦ひしが、羅馬軍終に大敗して、復た戦ふこと能はず、退て、城堡を守る、カルリ一軍勝に乗じて羅馬に亂入し、火を縱ちて府中の大半を灰燼となす、カルリ一軍城堡を攻撃せしかども、陥ちいらず、攻圍すること殆んど七箇月に至りしが、會々軍中に於て疫癘大に流行しければ、羅馬人和を講じ、償金四十八萬七千五百、ギルデン出して攻圍を解き、カルリ一の軍退きたり、此の羅馬危急の時、七月十八日なり、故に羅馬にては、此の日を以て大厄難の一として、常に紀念せりと

羅馬は元來羅馬の同盟友邦なりしが、漸次羅馬の勢力熾にして、其市府多く羅馬に合併せられしかば、羅馬に於ても均しく元老たる統領たるの權利を要求せしかど、羅馬の之を拒みて聽かざるにより、遂に干戈に訴へて之を争ひしも、戦敗れて遂に羅馬の殖民地となる、抑羅馬の制度規律は甚だ整ひしに、羅馬人が之に對する協同一致の力薄弱なりしたため終に其征服する所となりしなり

サムニート人は、年久しく羅馬と互に伊太利亞の首權を争ひ、大激戦三たびに及ぶ、其



第三の戦には、サムニート人必死の軍を起して戦ひしも敗北してサムニート羅匈及  
 エトリツリ等悉く羅馬に降り、其所領となれり、是に於て羅馬は殆んど伊太利亞の  
 政權を掌握して益々國基を堅固ならしむることを得たり、此戦争の間五十三年にし  
 て、紀元前三百四十二年より同二百九十年に至る

茲に又危難なる戦争起る、そは羅馬の領土愈擴張せしにより、遂にタレンチュムに接せ  
 しかば、其境界の争より互に罅隙を生じたり、抑タリンチュムは、南伊太利亞の希臘殖民  
 地中、最も富強にして、且つ開化せしなれば、羅馬人の武骨野風なるを輕蔑すと雖も、其  
 剛毅武勇なるには敵すべくもあらず、茲に希臘同俗なるエビリユス國の王にベルリ  
 ユスなる者あり、王は歴山王の同類にして、豪氣の人なりしかば、タレンチュムは援を王  
 に乞へり、王は之を諾して、軍隊と共に巨象二十頭を率ゐ、海を渡りて來り援ふ、此象は  
 歴山王が印度より引き來りし殘餘のものなりとかや、象を軍陣に使用するには、先之  
 を敵陣に放ち、其歩隊を蹂躪せしめて之を破り、其混亂に乗じて、我が軍を進撃せしむ  
 るを使象の戦術となせしなり、紀元前二百八十年、ベルリユス王、伊太利亞に上陸し、大  
 に羅馬軍と戦ふ、戦勝を獲ると二回なり、羅馬敗走せしにより、王は軍を進めて羅馬の  
 近傍カムパクニエーに迫り、之を屈服せしめんと欲し、シネアスなる辯士を遣りて和を

議せしむ、王の使者シネアス羅馬の元老と相會し、雄辯を振ひて和戦の利害を論せし  
 かば、今此の危急の難を知れる元老は、其要求を容れんと欲せしに、茲に又クロウジウ  
 スなる白髮の盲老あり、國家の大事を議すると聞き、人に扶けられて元老會議に列し  
 て曰く、噫吾れ兩眼を失ひ悲むべきことの多き不幸に遇ひしも、未だ讐なるに至らず、  
 汝等が此の臆病卑怯なる言を聞くを免かれず、且つ羅馬の名に汚辱を蒙らしむるが  
 如き評議は、余之を耳にするに堪へず、汝等は確かに知るべし、マセドニヤの歴山若し  
 伊太利に來らば、其大勳功も其大名譽も之れを奪ふべきにあらずや、汝等の決議は、何  
 ぞ豪膽ならざる、汝等は何の故にエビリユスの軍を懼れて震慄するや、彼はマセドニ  
 ヤ人の餌にあらずや、彼は歴山の兵仗を擔ぎし一士卒なり、其恩によりて生命を保つ  
 僥倖の軍隊なり、斯の如きものに屈辱せらるゝは何事ぞやと、盲翁の一言によりて衆  
 議忽ち決し、使者に答へて曰く、王の軍伊太利の地を去るにあざれば和を議すべか  
 らずと、使者シネアス歸り報するに、元老會議の決議を以てすといへども、其事情を悉  
 ず能はず、惟言ふ元老會議は諸國王の會盟の如し、甚だ威勢あり、且敵は魔軍の襲ひ來  
 るが如き形勢あり、之と戦ふことは利にあらずと、羅馬にては、前年まで統領たりしハ  
 プリシウスを使者として王の陣に往かしめしに、シネアス王に告ていへるは、此の男



子は極めて貧窮の人なりと雖も、其正直なると剛毅なるとの故を以て、羅馬に於ては最高の尊敬を得たりと、王之を聞きて、ハブリシウスを禮遇すると極めて厚し、之に夥多の財寶を贈りて曰く、是れ君の高節を汚がすにあらず、偏に君を敬愛するの意に外ならず、貴賓として禮意を表するのみと、ハブリシウス固辭して受けず、次の日又來る王は其事に當りて如何なる氣象ありやを試みんと欲し、ハブリシウス未だ嘗て見たることなき一の巨象を幕内に隠し置き、會議の終るを待て之を放ちしに、彼の巨象は幕の中より獅の吼る如き聲を發し、其鼻を延べてハブリシウスの頭上に及ぼしたり、王注意してハブリシウスの顔貌を熟視し居たりけるが、ハブリシウス更に驚ける氣色なく、靜かに顧みて笑て曰く、昨日王の黄金毫も吾を奪ふこと能はざるが如く、今日も王の象は吾を驚かす能はずと、王は深く其義勇に感じ、之を親友とし、上將となさんと欲して、百方手段を盡せしかど更に寸効を見ざりしとなり、是時恰も羅馬の大祭に當りしかば、王はハブリシウスに敬意を表する爲め、盡く羅馬の捕虜を放免して歸らしむ約して曰く、汝等羅馬に到り、相與に祝祭を樂しむべし、祭畢らば速かに我陣に歸り來るべしと、捕虜の羅馬に到りし時、統領亦之に命じて曰く、汝等一人たりとも約に背きて羅馬に滞在するものあらば、死刑に處すべしと、期日に至り捕虜皆約を違がへ

すして還りしとなん、其次の年、王の軍アプッリーを攻めて之を取る、羅馬の統領デシウス之と會戦し、デシウスは戰死す、是に於てハブリシウス再び擧げられて統領となり、兵に將としてベルリウス王と對陣せしに、王の侍醫逆心を懐くものあり、密書をハブリウスの許に贈りて曰く、若し厚賞あらば、子が爲に王を殺すべしと、ハブリウスは書を受けて直ちに之を王に送りしかば、王は之を見て驚くこと大方ならず、呼で曰く、ハブリシウスをして其誠直の道を失はしめば、大陽も亦其行道を脱すべしと、王は深くハブリシウスの高義に感じ、直ちに逆醫を誅し、盡く羅馬の捕虜を還へして之を謝す、又使者アネアスを遣はして和議を講せしむ、然れどもハブリシウスは、堅く前議を執りて動かさずして曰く、王先づ伊太利を去るにあらざれば、決して和を議せずと、其答ふる所前の如し、而してタレンチュムとサミニイとの捕虜同數を送りて之に酬ふとなん

ベルリウス王は羅馬の終に和すべからざるを察し、愀然として曰く、斯る軍を繼續せば力盡きて軍を亡さんのみ、去らばとて爲すなくして空しく歸陣せんは、是れ耻辱なり、如何せんと思ひ煩ひしとき、恰も好し希臘の殖民地なる西々利島外はカータゴ人に攻められ、内は虐政に苦められてせんすべなく、援を王に乞ひ來りしかば、爰に王は







を利全島を羅馬に與へ且つ軍費八百萬ギユルデンを償ひ羅馬の捕虜は悉く之を解放せり西々利は羅馬の奪領中最も貢物多き所領なれば副統領を置いて之を鎮め毎年交代せしめしとなり

カトセージは此の戦敗の後再び危難に際會せりそは雇兵と所領の民族と徒黨を結び非望を企て反亂將に起らんとせしをバミルカルの方能く之を制壓することを得たりと雖も羅馬は又此反亂の機に乗じ難を構へて大に獲取せんと圖りしかばカトセージ已むを得ず和を講じ償金三百萬ギユルデンを出せし外又サルジニ島を失へり

此の和約の後兩國互に新領地を有せんと務めカトセージの將ハミルカルの婿ハスドリュエバルは兵威強盛にして西班牙の大半を降しイベリユスの地に及びしが羅馬は又此の地を以て防禦の關と爲し力を盡して抵抗しカトセージ軍の通過を許さざりし

此間に羅馬はヨルシカ島を取リイルリントを伐ちシスアルベジのカルリトを降せり

第二ブエニの戦争

當時カトセージの將ハミルカルの子ハンニバルは義兄ハスドリュエバルに代りて西班牙に在りしがカトセージの軍隊はハンニバルを將帥に推戴せんと欲す是に於てカトセージの元老相議して之を擧げて其軍に將たらしめたり

ハンニバルの父ハミルカルは名將たり義兄ハスドリュエバルは大政事家たりハンニバルは此の二者を兼備せりといふ

ハンニバルは實に曠世の人豪たり其事に當る心を用ゆると尤周到思慮を盡して然して後に行ふ其一たび決するや半途にして廢することをなさず必ず之を遂行せり又軍機に長じ戰術に鍛鍊す事あるに臨では睡眠に就くことなきも毫も意に介せず又飢渴に耐ふる事尋常ならず暑を畏れず寒を避けず眞に軍人たるの資格を具ふるものと謂ふべし考慮一たび熟せば神機輒ち活動し呼で曰くカトセージ盛なれば則ち羅馬は亡ぶべし羅馬盛なれば則ちカトセージ亡ぶべしと遂に大事を擧ぐるに至れり

ハンニバル羅馬と戦を開くの第一着手は西班牙民族を助けて其東方の敵たるサコンナム人を討伐するにありサコンナム人は羅馬と同盟せるを以て屢々使を遣はし救を羅馬に請ふと雖も羅馬遲疑して答へずハンニバル其市城を攻圍みて之



れを降すに及び其飛報羅馬に達しければ羅馬乃ち使者をカーセージに馳せ要して曰くハンニバルを羅馬に送與すべし若し聽かざれば是れ即ち戦争の宣告なりと此の要件の拒絶せらるゝは亦避くべからず是に於て第二のプウニス戦争起れり羅馬人は之をハンニバルの戦争と稱せしといふ

羅馬は謀議して一軍を西班牙に出しハンニバルを攻め又一軍を阿非利加に出してカーセージを攻めんとすハンニバルは羅馬の計畧を看破し敵に先んじて之を制せんとし古來有名なるアルペン越の行軍を起しける此行軍中或は犖猛なる蠻民との戦絶へず或は荒涼無人の境を過ぎ百難千苦を排して希望を遂げ羅馬の城内に侵入し上以太利に於て始て羅馬軍と衝突し之を撃破すること二回に及ぶ是れ紀元前二百十八年の事なり其明年には又伊太利亞のエトリューに攻め入りたり

羅馬にてはハピウス、マキミヌスを總統領に擧げて總督とす總督ハピウスは敵を奔命に疲らし糧食を缺亡せしめて之を困憊に陥れんと謀り故さらに敵を避けて戦はざりしかば時人はハピウスを渾名して愚圖大將と呼べりしと云ふ

ハンニバルは日に掠奪せし所の糧食多く其軍隊を給養するに餘りありといふ明年羅馬は總領二名を擧げて軍國の總督とす其一人をガシウスバルロといひ其一人を

リユシウス、ハアリユスといふハアリユス謀りてハンニバルを要地に據りて邀撃せんとすバルロは淺慮にして其謀畧を用ひずハンニバルは世事に達し人情を見ること明かなればバルロが羅馬軍の總大將となるの日既に其が才幹智能の如何を洞察しければ之を挑みてアプーの東方カナンに戦ひ大に羅馬軍を撃破したり此の大將の爲め禍の波及する所下伊太利の同盟は殆んど瓦解するに至れり

羅馬の軍ハンニバルの爲に連りに破られ國の存在も其望絶へなんとしけるに羅馬人は猶屈せず益々勇敢の氣を鼓してクロウシユスを將として西々利島に遣りて市城シラキユスを攻畧せしむシラキユスにては有名なる幾何の大學者アーシメデスの發明せる攻具を以て之を防禦し大に敵兵を惱まし殺傷する所多く防守の方畧を盡すといへども遂に羅馬に降されたり

當時西班牙にては彼我の軍互に勝敗ありしが茲に氣運一轉の時期到來せり羅馬にてコーネリユス、スシピオなる者其父なる老スシピオに代りて統領となり西班牙の羅馬軍に將とし西班牙の新カーセージに於てハンニバルの義兄ハストリユバルと戦て勝を得たりしに此の時ハンニバルは伊太利に在りて本國の救援甚だ乏しかりしゆゑハストリユバルを西班牙より迎へて共に力を合せんと欲しハストリユバル



遂に西班牙を去る羅馬是に於て悉く西班牙のカーセージ領を有す時に紀元前二百九年なりハストリユバルは西班牙を去りてハンニバル行軍の險路を取り伊太利に侵入するに及んで羅馬の統領リウシユスは統領ネロの軍を合せてセナの近地に戦ひハストリユバル茲に戦死しければ其軍も亦潰散す是時紀元前二百七年なり伊太利に於けるカーセージ戦勝の結末は斯の如くなりしなり

此時に當りてハンニバルはブリツチ地に於て塞を構へ専ら自衛防守してありしがカーセージは自國の安危に繋る憂あるを以てハンニバルを迎へて之に當らしむ同二百六年前の事なりける

統領スシビオは西班牙より羅馬に歸り來り胸中已に算を決しけん軍を敵地に移して兩國戦争の終局を一舉に決せんと謀り亞非利加に渡り東ニユミジ王の援助に依りハンニバルの軍とカーセージの南西ザマルに戦ひて之を破れり是れ紀元前二百二年の事なり其明年兩國の和議成る其約に云ふ爾來カーセージ人は亞非利加の地を限りて其他に出べからず軍船は十艘を除くの外悉く之を羅馬に渡すべし且賞金二千五百萬ギョルデンを納むべし又羅馬の許諾を受けずして私に軍を興すべからずと時勢斯の如くなるに至りしかばハンニバルも羅馬の怨仇免かれ難さを知り

之を避けんが爲めに止むを得ず母國を去り始はシ、リー王アンチオキユス三世に倚り次でピチーニーに到りしがこゝにて危く羅馬の掌中に落ちんとせしかば終に毒を服して死せしとなん

是の時に方りて羅馬の威勢東西の諸國に振ひしかば遂に又第三のプウニス戦争を起すに至れり是戦は紀元前百四十九年より同四十六年まで三箇年に亘れり

羅馬既にカーセージを制御しければ遂に世界を統一せんと欲し其目的を達せんが爲めに先づ二策を定む其一は軍隊の武力を用ゆるに在り其二は政略を以て弱國を保護し強國を挫折し及び數多の反抗同盟を妨拒するを務むるに在りしが其畫策する所能く機宜に適中せしかば終に其志望を遂ぐることを得たり

當時東方の各國いづれも衰頽に傾き其國に王たるもの悉く偷惰安逸に流れ國民の元氣も隨て鎖沈し軍戦のこと全く廢荒に屬せしが羅馬が初めて戦争を宣告せしはマセドニヤ王ピロプスなり是れ蓋しハンニバルの伊太利にありし頃同盟して兵力を戮せ以て羅馬を攻伐せんと謀りし故なり此戦争はマセドニヤ王の敗績を以て終れり其嗣王ベルセウス又兵を擧げて羅馬に敵し羅馬の將パウリユスとマセドニヤのピトナに戦ひ王の軍中にて有名なる勝兵と稱せしパランキユス隊も散々に撃



破せられ王も終に捕はれて羅馬に客死せり而してマセドニヤは終に羅馬の版圖に歸せり

羅馬又シリヤ王アンチオキユス三世に軍を挑み其領土を蠶食して殆んど小亞細亞の全土を畧せり次でアエトリヤ同盟希臘數部の同盟を降伏せしめ之を破壊せり後希臘を改めてアカジヤと稱し之を羅馬の所屬とす又イルリヤ及びエビリユス等の諸國をば悉く羅馬なる世界國の區域に屬せしめたり爰に羅馬はカーセージを強制せしも尙飽き足らず憎嫉の念止まず老カトが元老會議に於て演説の結論にいづも必ずカーセージを全滅せしめざるべからずといへりしとぞハンニバルのカーセージを去りし後羅馬は東ニユミジヤ王マシニツサを煽動してカーセージの領地を奪はしむカーセージは久しく其亂暴に苦しみに堪へず兵を興して戰に及びたり羅馬は兼て待ち設けしとなれば此の機會をば逸すべからずと爲しカーセージに要求して曰く貴族の子弟三百名を以て人質として羅馬に送るべし曰く兵器と軍用諸品とは悉く羅馬に渡すべし曰く其引渡を完了せばカーセージは市城を退き遠く内地に移るべしとカーセージ人は此の報を聞くと齊しく皆怒り憤怨に堪へず死を決して孤城に據り比類なき勇氣を振ひ防禦の術を盡し嬰守二年餘にして城竟に陥り

慘殺せらるる者勝て數ふべからず血を流すこと六日六夜兵火の滅せざること十七日なりカーセージ人七十萬の内生殘るもの僅かに五萬人而かも又皆捕虜となり奴として他に賣らるる是に於てカーセージを改めて亞非利加と稱し羅馬の版圖に入るカーセージ滅亡せし後羅馬の驕傲は益々甚しきに至ると云へりカーセージの事は當院雜誌第十九編の六に記載せり茲に一言申述べ置きたき事あり羅馬とカーセージの興敗の跡を述ぶるは恰も古物會に二千餘年前の舊器物を陳列するが如くに思はれるなれども此後世界の勢を推察して將來を想像すれば古羅馬古カーセージよりも猶幾倍の強大なる邦國興りて世界の海と陸に大變遷を致すべき時運到來すべしと余の淺智は頻りに想像するなり

爾來羅馬の威光四域に耀き昇平の運開け百貨輻湊して大都に充滿し其繁榮般富なることは此時を以て極盛とす然れども惟一時を欺くの虛榮なりき  
斯の繁榮なる裏面に已に政策の大なる過誤を生じ國家紛亂の萌芽を養成しつゝあり

抑も羅馬の憲法は國民の階級を廢し豪族と農族との差別を除き民人平等の制度なりしに是に至て新に貴族の高級を設け功あるものには之を授くることとなし新貴



族は高官の執政となり其官職を子孫に傳ふることを得又國有の領土を私有するの特權を得其他羅馬版圖内に於て執政の長官たることを得たり是に於て新貴族たるものは年に富み財貨を積み榮耀を極むるに至りしなり

是れよりして羅馬の社會には富榮なる貴族と無産なる民族と双方懸隔せる状態を顯はし無産の民族は漸く議權を失ひ國會に發議して自己を擁護することを得ず而るに茲に又戰時の騎士と同等の財産を有するものには皆騎士の資格を與へたるにより其員數大に増加し世は太平無事にして戰役なきが故に新騎士は其財貨を利用して諸地方より納入する租税を請負ひ専ら射利を務めて暴富を致すといふ

羅馬にて昔時の土地は小地主の耕作地なりしに此の新制行はれて以來其耕地は漸次に富貴者の併有する所となりて恒産なき小地主は四方に離散し到る處耕作地の荒蕪に歸するもの多かりければ富貴の大地主は奴隸を使役して之を耕作せしむることゝはなりぬ奴隸はもと土着農業者の如き生活を營むものにあらず皆遷徙常なき無産の徒なり此等窮民漸く四方より羅馬に群集し來りて救を乞ふもの多く果ては我輩も發言して食糧を請求し得べきものとし之に税金を拂ひ與ふべきものゝ如き舉動をなすに至りしとなり

當時羅馬にて貧者と富者と隔絶すること非常にして貧者は愈々窮乏し空氣と温との外一物だも私有するものなき境涯に陥りたるに之に反して富者は益々殷富を致し百貨を積み錦衣玉食其榮を極めたりと云へり

古來土着人民の實義にして親睦なる風俗は敗れ加ふるに外國臣民の奴隸とせられて羅馬に來るものは皆流氓無産の徒にして恒心なきものゝみなれば屢々徒黨を結び内擾を起したり西々利一島にして奴隸の亂は二十萬人に及びしと云へり

抑も羅馬が武功を貴び外國との戰爭を事とし諸國を征伐して凱陣するごとに其降伏君民の財寶を掠奪し之を羅馬に輸入せしこと實に莫大にして測るべからず之を以て羅馬に美觀を添へ之を以て羅馬を繁盛ならしめたり其繁盛なるに隨て富豪なるものは就て驕奢を恣にし榮華を誇り淫欲に耽り昔時の氣象次第に衰へ風俗大に敗れ賄賂は公けに行はれ犯罪者のみ殖へ同朋互に殺戮するに至れり

羅馬の社會の如くなりしかば今にして此衰頹を挽回するにあらずんば羅馬の破壊近きにあらんとてチペリユウス、グラシユウスなる憂國者一身に大改革の任を負ひ以爲らく國本を鞏固ならしむるに非ざれば國民の安堵期すべからず之を鞏固ならしめんには國內の貧民に土地を私有せしむるに若くはなしと紀元前百三十三年チ



ペリユウス、グラシユウスが民會議員に擧げらるゝに及て久しく世に廢りたる舊制に準じて所謂シリユウスの耕地法に修正を加へ議題となす議題は舊制に準じて國有地の所有は五百ジュゲラ前に見ゆを限り此制限以上の所有地を收めて國有となし其國有の地を配分して羅馬及び其同盟の窮民に賦與する者とす但從來の所有地主の子にして成年に達するものには特に其半額の耕地を加ふべしとの寛典を附したりし

此の改革を行ふに方り傲慢貪慾なる貴族元老の幾多抗拒妨害に遇ひしもチベリユウスの剛膽と雄辯とを以て之を説破し漸くにして其議題は民會を通過したり後再び其協議の日に當りてチベリユウス之に臨まんとして其門に到るに及びて群民の雜沓中元老の徒黨蜂起して之を要し激烈なる血戦起りチベリユウス及び其同志三百人皆殺害せらる

チベリユウスを謀殺すと雖も其改革の大事頓に熄む可きにあらず其弟にガジュウス、グラシユウスなる人あり亦名士にして天稟の才智を備へ能辯また人に優れたり兄の業の成らざるを悲み其遺志を繼がんと欲す然れ共未だ敢て容易に事を發せざりし元老等はガシユウスを畏憚し相議して之を遠けんと欲し會々ガジュウスが

羅馬會計長官としてサルジニヤに在勤せしを機とし其勤務の延期を謀りしがガジュウスは其姦計を察して獨自から羅馬に歸れり然れども是れ其任期の既に満ちて正當の所爲なるを以て如何ともすること能はず民會はガジュウスを擧げて議員とせしかばカジユウスは此の好機會に乗じ其宿論なる耕地法を施行せんと欲し豫備として先づ羅甸の地方に於て移民地を設け之れに民法を布き以て耕地配賦の權利を與ふる等の處置を施し次で國事犯の裁判權を移すの法案を以て元老に向て攻撃を始む元來元老等此の裁判權を以て己が職權として濫に之を行ひ弊害甚だしきが爲めに王代より貴族と平民の中間にありて門閥あり政權ある騎士をして國事犯の判官たらしめんことを要求せしなり

是に於て元老等大に驚き此の法案は自己の權力を縮小せんを恐れ相議してガジュウス、グラシユウスの移民事業を利用して之を阿非利加に派遣しカーセージの舊地を開發せしむ斯くして歲月を経過する間に此の法案を廢除せんと謀りしなり而して又一方には反對黨のリビキウスを議員に選舉し其耕地法案等を駁撃せしめガジュウス、グラシユウスを議員より退け且又一方には激烈なる反對黨オピシウスを擧げて統領となしたり



此時ガジユウス、グラシユウスは移民の事を以て阿非利加より歸りしに事情已に一變して時勢大に非なりしが元老等もまた其歸り來りしを憂ひ此の耕地法等を廢棄せんには寧ろ兩黨を激昂せしめ尙一たび内亂を挑發して之を除くに若かずとなし意を決して國害を除くを以て名となし統領オビシウスを總統領に擧げ之に兵馬の全權を委ね全勝を制せんと謀りたり是に於て遂に内亂起りガジユウス、グラシユウス及び其政友フエルベキス等三千人皆之に死す而してグラシユウス兩氏改革耕地法終に功を成さずして了れりこれをグラシユウスの羅馬騷動といふ是れ紀元前三十三年より同百二十一年まで十一年間の事なり史は云ふ羅馬共和政治に於て兩黨の政争よりして内亂を激發せしめたる是非曲直の論は姑く措くも識者は何人も權門貴族の倨傲にして貪欲なる者の勝利を獲たるを喜ぶものはなかるべし蓋し歴史は後世に大警戒の例を貽したり政權者の自恣隨意の所爲は最も貴ぶべき人望を獲べからず又最も良き目的を達すべからざることを明かに示したり公平なると正義なるとは眞の自由の本源なり國法を犯して政治に急變を來し以て永く國安を維持せんと欲するは固より其罪惡の勝利の能く爲すべき所にあらず權門貴族惟名利榮達の爲め眼目を眯まされ順に隨て改革し國家の腐敗を救済すべきを逆に向ふて

暴行し益々羅馬共和政治の破壊を促じたり

●羅馬貴族の腐敗

明治三十二年五月十四日 東京學士會院講演

今日も續きて羅馬の演説なり羅馬の貴族が政權を擅にし國有の土地を私有となして大に富み富むに隨て奢侈自から矜り奢りて盡きず費して足らず政權は賄賂を貪るの具となり貧者は滋々増加して人心甚だ安からず漸次に内訌を醸成するに至れり何の時代に於ても賄賂盛んに行はるゝときは民間其の風に倣ひ公利を棄て、私利に走り國の元氣次第に萎靡して衰運に傾くの前兆なるべし以下述ぶる所にて知らるべし

グラシユウスの羅馬騷動平定せし後は其修正耕地法も亦廢せられしと雖も彼の國事犯裁判所のこと猶ほ存立して貴族と平民との争論息まず愈々互に疎隔しけるが貴族は猶獨り優遊自得して天下の太平を號呼し徒らに驕傲の風に長じ終に國家の禍種を蒔き内亂を媒助するに至れり

當時元老輩が所爲は自から己れを欺けること多く彼の總統領オビシウスが功德を表せんとて爲めに一大堂を建築して之を一和殿と稱せし如きは是れ其一例なり然



れどもオピシウスの犯したる罪惡の報酬は他日身を否運に陥いれたり  
又當時貴族の根性の甚だ腐敗せることはジュキルタとの戦役に於て之を明らかに  
するに足れり

羅馬の同盟國なる阿非利加のニミジ一國王死して嗣王繼ぎて立ちしが伯父ジュキ  
ルタなる者王を弑して其國を奪はんとす王の弟アドヘルバル之を羅馬に訴へて其  
保護を乞へり是に於て羅馬の元老使者十名を擇びて其處分を命じオピシウス之れ  
が主任たり使者其國に到りしに弑逆の罪は一も問ふ所なく其國を二分して一をジュ  
キルタに與へ他の一を王の弟アドヘルバルに與ふジュキルタの受けし領地は豊饒に  
してアドヘルバルの領地は瘠土なり是れ羅馬に於てジュキルタが其知友なる貴族  
及び元老に黄金を贈賂せしに由てなり使者が其處分を決行して歸路に就くや否や  
ジュキルタは恣に王子を幽閉して其領地を奪ひたり是に於て王子は再び之を羅馬  
に訴へ元老の救助を乞ひければ羅馬は復た使者を遣りて之を視察せしめしにジュ  
キルタ奸策を運らして之を欺瞞し反て王子をして一物をも得る所なからしめたり  
或は云ふ之れを害せりと

ジュキルタ又賄賂を贈りて元老に乞ふ元老輩竊かに相議して其罪迹を湮沒せしめ  
んとなしけるに民會議員にメムニウスなる烈士ありて公に之を議し其不法の罪を  
鳴らし羅馬に大辱を與へたる振舞なりと責ければ元老等自から大に之を愧ぢ且つ  
人民の激昂を來さんことを恐れて統領ベスチアを將として兵を阿非利加に遣りジュ  
キルタをして伏罪せしめんと謀りたりジュキルタは統領ベスチアの利慾あるを知  
り陷はしむるに夥多の黄金を以てして之を籠絡し其他元老中最も威權あるスコウ  
リヌに略めて己が責罰を輕からしめ以て除國の議を防遏せんと巧み且つ其の謝罪  
の意を表せんが爲めに黄金及び象馬家畜の類を貢獻せんことを請ひたり然れども  
是れ時に名のみにして實は羅馬の將と密約して其陣を撤去するに臨みて悉く之を  
陣中に遺去せしめたり蓋し此の密約の奏功せしは彼の陋むべく愧づべき賄賂の致  
す所なり

此の奸計羅馬に聞えしかば人心大に激昂し民會議員メムニウスは大に怒りて貴族  
が專横陋劣の所業を責めジュキルタを羅馬に呼寄せ其の大罪を犯せし所以を糾問  
し且つ羅馬の尊榮に汚辱を與へたる輩を處斷せんことを迫りけるにジュキルタは  
豫じめ之を知り先づ黄金を以て其の知友貴族に陷はしめ必ず身の安全無事なるべ  
きを信じて然る後羅馬に來れり是に於てメムニウス之を公會に呼出し其罪を白狀



すべしと命せしにジュキュルタの知友貴族と同腹者なる民會議員パピウス爲めに之を辯疏してジュキュルタの白狀を制したりジュキュルタは罪を親族なるボミルカルに諉し其計畧に欺かれしなりと陳謝しボミルカルを羅馬に遣して自から逃れて其國に歸れりボミルカルも程なく亦脱走せしかば羅馬再たび兵を發して統領アルビニウスを將としてジュキュルタを伐たしむジュキュルタ計を設けて之を禦き或は和議を納れて之を欺き以て羅馬を誤まらせて之を窮地に陥れしかば統領終にジュキュルタと約を結びニミジ一國をジュキュルタに與へたり是れ亦賄賂に由れるなりと云ふ然れども此の條約は元老及び民會の認諾を経ざりしかば其所爲は羅馬を蔑視し羅馬を侮辱したるなりと云ふを以て終に之を破棄したり斯く羅馬は屢々失敗して事成らざりしかば今は一舉して戦局を結ばんと決意し貴族中廉潔正義の士メタルリウスを舉げて統領としジュキュルタを征伐せしむ當時羅馬にては民會議員マミリウス頻りに逼りてグラシヌスの裁判即ち騎士の裁判を開き嚴に賣國の犯罪者を吟味せしめたり此裁判の争ひ二年に涉りて四名の統領は賣國の大犯罪者と決して流刑に處せられけるが前統領オビミヌス前にも亦其一人なりし是れ己れが犯したる罪惡の復た己れに報ひ來れるなり此の舉大に貴族の傲慢なるを挫き人民の大勝利に歸したりと稱

せり

羅馬軍はジュキュルタと戦ひ連りに勝を得たりしかばジュキュルタは逃げてゲテユリ一なる蠻地に入り蠻民を驅り聚めて兵を起し又モーリタニー王と盟約し大舉して羅馬軍を撃退せんと謀れり

羅馬にては統領メタルリウスの對敵軍畧中に人民は元老の議を俟たず直に決議してマリウスを舉げて統領たらしむ是に於てマリウス軍を率ひて直に阿非利加に赴きジュキュルタの軍を撃て之を破り追躡して其南方不毛の水なき毒蛇の棲める荒地にまで攻め入り兵士と艱苦を共にせしかば人々マリウスの勇猛なるに服し之を天勇と稱せしとなん

モーリタニー王は己が國の滅亡に至らぬことを懼れて羅馬と和睦せんことを請ひしかば統領マリウス其の軍事判官たるスルラを舉げて其事に當らしむスルラの談判にて其變心常なき王をしてジュキュルタを引渡さしむるに至りたり是に於て此の戦争全く終りジュキュルタ捕はれてマリウス凱陣の獲物として羅馬に引かれ後ち牢窟に投せられ饑餓に苦みて死せしとなり

マリウス暫時にして凱陣し其の軍功の既に顯著なりしにスルラは貴族の故を以て

羅馬貴族の腐敗



貴族黨は之に加増し専ら功をヌルラに歸し彼の邪智横道なる王を制服せしめたるは一にヌルラが智謀勇畧に由るなりと只管之を稱譽しマリウスの名譽を傷つけんと謀りたれば是より兩黨相嫉むこと水火の如し

マリウスは氏姓不明なる賤民の子にして羅馬希臘の開化風儀に習はず粗野の氣象を有せる毅然たる羅馬古代の一武夫なりヌルラは之に反し希臘羅馬の文學を修め能辯にして而も敏捷なり其志望雄大にして名譽に熱心し友を得るに巧にして陰謀を秘するに妙を得たり且つ平生甚だ娛樂を好み金錢を浪費する病ありといふ

今や兩雄の徒黨互に相争ひ頗る危機に迫りしが茲にマリウスが國難を救ひて其の勳功の偉大なる敵黨の右に出づるの機會到來せり

日爾曼人種にして軀幹長大慄悍犇猛なるシムブレン族とテウトネル族と云へるありて此の二族が大舉して以太利亞に襲來せしことあり是れ今後四百年に於て外蠻が大移轉を起して洪水の如くに羅馬の域内に亂入し羅馬大政の根據を轉覆するに至れる前兆なり當時羅馬にては統領の再選を十年の間許さざりし成例ありしが人民は元老の議を俟たずしてマリウスを再選して統領に擧げ蠻軍征討の大將となす是れ紀元前百四年なり是に於て統領マリウス先づ軍隊の制規を改革し我が軍の敵

と戦ふ前に之を蠻軍に近づけ其の鉄鉞を持ち武装せる犇惡の狀貌を見慣はしめて我が兵士の怖氣を去らしむるの策を取り斯くして兵氣を養ひ然る後カルリーの南方マッシーの北セックチーに於て激戦しテウトネル蠻軍を撃破し又翌年カムピローチーに於てシムブレン蠻軍と決戦して之を全滅せしめたりしが是の時蠻軍の僵屍無數なりしかば爲に地味を肥やし其翌年マッシー人が廣大なる葡萄園は非常の收穫ありしと云ひ傳へり是に於て羅馬の危難は救はれければマリウス其の功を以て第六度の統領に擧げられ羅馬の拯救者と稱號せられたり是の時よりマリウスは民黨の首領となる羅馬が漸くにして外蠻の大難を免れしに紀元前九十年には又尙ほ危難の内患に迫り同盟の各州と干戈を執りて相望むに至れり其原因となりしものは本來の伊太利亞人にして羅馬に同盟し其憤發努力の援助に因り羅馬の擴大をも致しければ各州は羅馬人民と齊しく其民法の賦與を得て以て國政に參與せんとを請求せしに羅馬は之を拒絶して納れざりしかばマルセン人サムニー人リッカニー人等合議結托して羅馬と分離し同盟聯邦を興しサムニームのコルヒニウムを以て聯邦の都府となす是れ内亂破裂の始めなり其の戦争の激烈なる二年の間に涉りて伊太利亞全土は殆ど將に荒土に歸せんとす爰に至りて羅馬大に省みる所ありて寛



容にして智慮ある處置を施したり即ち羅馬の同盟を繼續せし州には其の民法を賦與し又干戈を始めし州にも均一に之を賦與すべしと約しければ内亂始て治りけり此の戰爭に因りて羅馬と伊太利亞との關係大に改まり政體に新面目を開き從來專横の首位たる羅馬は惟々政治施行の府と變革したりけり羅馬分裂の内亂に於て最も戰功を奏せしはマリウスとスルラなりしがスルラは將帥とし政治家として兩ながら伎倆を具ふと雖ども其の性甚だ殘忍にして其一たび目的を達せんと欲するに當りては酷薄非道を行ふも顧みる所なかりしなりスルラ竊かに共和政の漸次に隆盛に至らんとするを憂ひて政體を變せんと欲し前の貴族政を恢復するの謀圖を抱きければ民黨の首領たるマリウスに反して愈々不和を起しぬ始め兩雄互に仇敵となるに至りしは羅馬がポンテヌス王ミトリダテスと戰爭を開きしに由れり

ポンテヌスは小亞細亞の東方黒海の南方に在る小國なりしが此王英傑にして漸次領土を四疆に擴めて小亞細亞は殆んど其所領に歸せんとするに至る終に羅馬の殖民地と衝突を起し紀元前八十八年ポンテヌス王が其の殖民地の各市府に攻め入り土人

を殺害すると一日八萬人に及び或は其將を捕へて羅馬人は黄金を貪るゆる之れに飽かしむべしとて黄金を鎔して其口に注入せし等の事ありしが此報羅馬に達するや都人は大に憤怒しければ元老直ちにスルラを征討總督に任したるに元老の處置舊例に戻り專横なりとて民會の議決を以て之を廢棄しマリウスを擧げて征討總督たらしむ然るにスルラ其の軍隊を率ひて羅馬に入り來り武力を以て其の兵權を握らんとせしかばマリウスは逃れて羅甸の一地に到り沼澤の内に匿れしを見出され身に泥土を被りて市街を引かれしが幸にして危き命を免かれける一奴隸のシムプリー人はマリウスを害すべき命を受け鉄鉞を以てマリウスを殺さんとせしにマリウス叱りて曰く汝は吾を知るや吾は是れテウトン族とシムプリー族を擊滅せしマリウスなりと大音宛から雷霆の如くなりしかばシムプリー畏縮して覺えて手に持ちたる鉄鉞を落し殺すこと能はざりしとマリウスは土人に助けられ遂に阿非利加に逃れぬ

時にスルラは軍を率ひて希臘に渡りポンテヌス王と戦ひ其軍を破りて之を降服せしめぬマリウスはスルラの出陣中羅馬に歸り來りければ忽ちスルラ黨と戰闘起り殘虐甚だしき内亂となりぬマリウスは第七回の統領に擧られしも暫くにして死した



りける

スュルラ凱陣して羅馬に歸るや否や民黨を芟り盡しければ頓て内亂は治まりぬ是に於てスュルラ命じて敵黨の名籍を作らしめ籍に載せたる人名は殺戮隨意なりと觸れ出しければ人の生命を失ふもの數千の多きに及ぶ又其の財産を悉く沒收して皆之を國有となしぬ斯の如くして民黨を討滅せし後スュルラ國政を改革し貴族政治を興し自から無期限の全權統領となり民會には立法の議權を奪ひ元老には軍事裁判の權を回復し又別に裁判所を創設して茲に犯罪者を判決せしめたり二年の間スュルラ無限の權力を振ひ其の黨中拔群の士としてクネヴス、ボムペイウスを擧げて我が繼續者となし之に全權統領の顯職を譲り退隱して一年の間身に娛樂放逸を極はめ遂に烈しき嘔吐病に罹みて死したりける

此の篇の記事は紀元前百十二年より同八十一年まで凡そ三十一年の間なり

### ◎第一回統計講習會に於て

明治三十二年七月三十一日及八月十六日講話

諸君には初めて御目に懸ります

此の講習會に就て一言申述べし、此の會は有志者の徳義より起れるものなり、金を

寄する人あり、學術を供する人あり、事務の勞を捧ぐる人あり、講習生諸君は之に酬ふるの義務を覺悟して永く統計に従事せられんことを希ふなり、老生も諸君を學友として統計の講義を試みたき存念なれども、御覽の通り年老いて視力も衰へ不如意の事のみなれば残念ながら入會を斷りたり、然るに名前だけ副へよと強ひられソレでは看板計りで代物なきと同様、是れ最も困る譯だ、左らば一場の演説を致すべしと約束したり、講師はソレ々受持の課目に依りて教授すれば、余は統計の大畧を述べ統計とは如何なる學科、如何なる主義、目的、如何なる方法によりて爲さるべきものなるかを一通り分るやうに説かむと欲す、是によりて各自學ぶ所の學科の貴きことを稍々悟り、自然に樂みて學ばれるやうに成ることもやあらんかと思ふなり、唯事體甚だ大なれば一場の講話では甚だ六ヶし、定めて不審も多かるべければ遠慮なく質問あれ、老生の知得したる丈は辯解すべし

一統計の原語はスタチスチックと云ふ、其の定義の解し方を擧ぐれば、凡そ百種ほどもあらんと云ふ、スタチスチックの研究の困難なることは是れにても知らるべし

學者の眼方は、此の盤根錯節の難題を漸次に看破して、之を獨立の學科となしたり、スタチスチックは文明世界の通用語にして、誰れにても自由に使用すべきものなれ

第一回統計講習會に於て



ども我が國にては支那の文學が流行して勢威を振ひ、無理でも原語を支那字に翻譯せねば通用せぬやらの習慣は、遂に翻譯の支那字を原語の意味に解し、統計は總て計算するものと心得、物の數を並べさへすれば之を統計とし、芋の數、納の數、三十萬何々と記載せし事あり、今日にても統計書の數字は何の方法を以て調査せしや、又之を調査したる人は自ら責任を負ふて之に答へ得べきや、甚だ疑はしきことならん

一統計其者は無方法、無責任の數字を許さず、統計の數字は事實なり、此の事實に據りて學理に應用し、實際に活用すべし、統計として無方法、無責任の數字を記載すれば、人をして誤謬に陥らしむ、故に斯の如き統計は寧ろなきにしかずとの戒めあり、統計に従事する人は嚴に守るべし、支那の詩文は格別の興味も多かるべけれど、其の文字は文明の學科には不合格にして、智識の進歩を妨げ、貴ふとき意味も主旨も卑しむるやうにならしむるの患あり、スタチチックも此の弊に陥りたり、學者も亦餘り世にはやらんとあせり、我が學の卑しまるゝやうになるをも願みざる、責なきにあらず

佛徒は感心なり、梵語にて推通し、彌陀と唱へ菩薩と唱へて、曾て本義をかへず、スタ

チチックも彌陀や菩薩の如き深き意義を含める貴ふとき學科なり、學者先づ是の貴ふとき學科なることを自覺せむことを要す

一統計なる學科には目的あり、範圍あり、方法あり、責任あり、其の委しきことは、諸講師の講義にて聞知せらるべければ、茲には一括して其の畧説を述べし、先づ其の目的と範圍とは如何なるものと云ふ事より説て見るべし

一世間に釋迦が指を以て天を示し、地を示して居る畫像あり、是は如何なる利益を念ずるか知らざれども、統計の目的には叶はず、佛書に釋迦の言はれたといふ生老病死の四因あり、此の事稍々統計の目的に叶ふ、釋迦の神通力を以て人間の種々無量なる状態を達觀したらんには、其の中に善事もあるべし、惡事もあるべし、因果、因縁、不死、輪廻等、様々の工夫想像も起るならん、此の如き無形理想の出來事は、統計の範圍外にしてその目的にあらず、統計は人間現存の事實に限るものなり、人にして生れるもの、死せるもの、老ひたるもの、病めるもの、來るもの、往くもの、又其の年齢及び婚姻、離縁、各種の職業、並に産物、土地及び犯罪等、大抵統計の目的となる、又其の消長増減する所を探討し、推究するを要とす

一是れより方法の事に移るべし、方法にも種々あり、其の説明は講師に譲りて、老生は



卑近にして解し易き譬を以て説くべし統計方法の本は一ツ一ツづつ調べて數ふ、人の調べも其の通り、大人ならば一人に付て十五六條もあるべし、此の調は第一のものなれども、極めて錯雜なる事故、茲には述べず、手指の譬は宜しからん一人の腕には十指を具ふと云ふ、是れ慥かなる事實なり、然れども統計の方法は、總體を調ぶるものなれば、幾千萬の人、皆各々十指を具ふべきや否や、慥かに之を知らざるべからず、多數の人の内には一指を失ひ二指を失ふ等、様々なるべし、又右の腕左の腕のなき人もあるべし、一々之を調べ上ぐれば、幾千萬人中十指を具ふもの幾許、右の手指何ン本を缺きしもの幾許、左の手指何ン本を缺きしもの幾許、又右の腕左の腕のなきもの幾許と云ふ事、誰れにも明瞭にして疑惑なき様にすべし、又其の人の不具になりし原因を務めて詳かにし、説明を添へて之を記載し、他人の之に注意するを促し以て其の之を救ふの用に供すべし

之を統計の總探討法と云ふ、此の總探討法なければ、統計は用をなさざるものと知られよ

一 今又人の年齢に就て一例を挙げ以て説話の料に供すべし

總體の人数を年齢の種類に隨て區別し得べし、而して其の年齢に於て分量と性質

と云ふことあり、又年齢の分量上より觀察すれば、人間の生涯に不生産の年と生産の年とを區別し得べし

有名なるケトレー氏の説に云ふ、人にして不生産の年には何物をも作り出す事能はず、唯物を費すのみ即ち是れ父母と國民との負債者たり、其の生産の期に及んで此の負債を償ふべき義務を負ふものなりと

ケトレー氏は此の負債の全額を一千フランと積り、エンゲル氏は年に四十ターレルと積れり、余は之を年に四十圓と見る、尤も物價の高下等あれば、凡その平均を示せるのみ精しく調べたるにはあらず

人の一代十五歳迄を不生産のものとし、此の年齢者は將來國民の相續者たるべきものなるを以て其の死亡は國民にとりて此上も無き不幸なり、去れば此の年齢者の死亡は成るだけ其の數の少なきことを願はしけれ、然して若し不生産者の死亡にして免るべからずとせば甚だ悼はしきことながら其の死亡者は命數の成るべく短かしくらんとことを願はしけれ、そは不生産者の命數の短きは其の生活費も愈々減じ、之に望む所の念願も愈々薄く、隨て父母と國民の失ふ所も亦多からざるべければなり



一 國民の生産年間は十五歳より七十歳迄の間とすれば、其の年間に死する人の命數最も長ければ、最も好く國家の幸福なるべし。

七十歳以上の年に至れば、再び不生産の人となる、假令其の人死亡するも、自ら生産費を償ひ終りて餘りあることなれば、國家に於て之が爲めに損失あることなし、假令又斯の如き不生産の老人存在するも、其の人數甚だ少なきものなれば、國の富榮に差響きの及ぶは甚だのことあるべからず。

一 若し十五歳以下の不生産者死亡の結果として國民の失ひたる養育費幾許なりやを知らんと欲せば、其の不生産者存命中の年數に、毎歳の養育費を乗すれば、之を知り得べし、例へば五歳の死亡者五萬人あらば、此の年數は二十五萬年なり、之に養育費四十圓を乗すれば、即ち金額壹千萬圓となる、其の死亡者十萬人ならば、金額二千萬圓となるが如し。

一 右に説く所は、經濟上の損失を云ふなれども、社會上の事に於ては、大に之に異なり、若し三十歳にして一家の父たる人死すれば、十五歳の不生産者の死亡よりも尙損失多く、其の災難の及ぶ所は、一家のみに止まらざるべし、又稀れなる場合には七十歳の人の死が國民の利害に大なる關係あることあるべし。

一 人間生涯の年齢に於て斯の如き性質あり、分量ある事を知り得たるは、全くスタチスチックの力なり、今又統計の大家ウァベウスの調査せしものを擧ぐれば左の如し。

ウァベウス氏が佛蘭西、英吉利、北米合衆國、加那多等十四箇國の人民の年齢を集め、幾億の年數を得、之を類別して其の總民數を百分比となし、其の成果を示し、之に説明を添へたり。

總人民の十分の三餘は、生れてより十五歳迄のもの、即ち百分中三三六六なり、其の十分の一は、十五歳より二十歳迄のもの、即ち百分中九七二なり、然して二十歳より六十歳迄のもの、其の十分の半數に足らず、即ち百分中四八八八なり、此の年間には人間の勢力最も盛んにして、稼業を勤め得べきものとす、其の二十分の一餘は、六十歳より七十歳迄のもの、即ち百分中四九二なり、此の年間に於ては、勢力漸く衰へ、七十歳以上の高齢にして不生産のもの、凡そ其の十分の一、即ち百分中二八二なり。

一 今茲に明治十二年十二月三十一日、甲斐國現在人別の年齢調査と、ウァベウスの年齢調査とを左に並列す、甲斐國の年齢は余自ら出張し、嚴密に注意を加へて調べたるものと知られよ。

ウァベウス調

三三六六

九七二

四八八八

四九二

二八二

第一回統計講習會に於て

五一



甲斐國の調 三三一四 八七八 四九四〇 五六八 三〇〇

之を見れば其の數字に大同小差あり、是れ大數の規則と小數の規則との相違にして、大數は確かなり、小數は不確なり、甲斐國調の年數は極めて小數なり、ウ、ベ、ウ、ス調の年數は至て大數なり、若し之れと匹敵すべき程の大數を得るに至らば、或は同一の効果を呈すべしと余は思ふ、甲斐國の調は後に載す

右並列の數字を一見すれば、單に三三、九、四、八、四、二等にして恰も瓦礫を並べたるが如く、何の趣味もなく、何の道理もなきが如くなれども、其の數字は事實なり此の事實は現在の社會中に生々活動して運行息むこと無きものとす

又國民の全數を百分にせば、百分中の三十三人餘は、不生産の兒童なり、其の九人餘は不生産者と生産者との中間にある弱年者なり、其の四十八人餘は生産を營み得べき人にして其の四人餘と其の二人餘とは、再び不生産者に歸すべき人として見るべし、然らば生産者は四十八人餘にして百人中半數に足らず、不生産者は五十一人餘にして、百人中半數以上の人數となるべし

之を約して言へば、生産者一人にして不生産者一人を養育するの義務を負擔するものゝ如し、其の義務の輕重如何んを論ずるは、統計の干預すべきことにあらず、宜

しく經濟家、政治家等の考慮すべきものなるべし

又社會上より觀れば國民が不生産者たる少數の高年者に對して、養老の爲め報謝の義を盡すは易し、然れども不生産者たる多數の幼童を教育し、嬰兒を鞠養し、之を繼續者となさんとする未來の希望の爲に國民が盡す所の勞は甚だ多しと知るべし

一序に申すべし、近頃人の話に、我が國の小學生徒の數は四百萬人計ありと、今假りに之を四百萬人として、一生徒に付一年に四十圓を費すとすれば、其の費額は一億六千萬圓となる、年々歳々此の大金を出費して世間に未だ物議の生じたるを聞かず、之を推考すれば、是れ全く我が子孫を教育して我が善良なる相續人と爲さんと欲する幾百萬人の心相合して一となり、此の好果を結ぶものなるべし、統計に現はれたる一の現象は、多々の原因より生ずるものなることを心得らるべし

甲斐國年齢別

年	男	女	男	女
十五年以下	六、六三〇四	六、五三七八	一三、一六八二	三三、三五五
			三三、七三三	三三、二一四

第一回統計講習會に於て



年	男	女	男	女
十五年以上二十年以下	一、七四三八	一、七四六〇	三、四八九八	八、八二
二十年以上六十年以下	九、八七七四	九、七五六二	一九、六三三六	四九、九七
六十年以上七十年以下	一、〇二九四	一、二二八八	二、二五八二	五、二一
七十年以上	四八四八	七〇五六	一、一九〇四	二、四五
年知れず	四	六	一〇	〇
			三九、七四二二	一〇〇・
				一〇〇・
				一〇〇・

右表中の初段に十五歳以下とあるは、一歳内の人数より十五歳迄の人数を集めたものなり

其の次段の十五歳以上二十歳以下とあるも、同式なり其の外之に準ず  
 表中の三三一四 八七八等の如きは、甲斐國の總人数三十九萬七千四百六人を百分比例として、覽者に見易からしめむが爲めなり  
 元來總計に並列する數字は、讀んで分るものにあらず、能く之を熟視し、其の互に關係する所の事理を辨別し、之を胸中に運用し、或は事業に施行し、或は學理に應用す

べきものとす、然らざれば統計は無用の長物なり、諸君よく得心あれ

一 統計は事實より道理を推知する人智の器械なれば、或る事物を知ることを得て、其の未だ知れざる事を推究し、得るの効用あり、又未だ知らざる所の事物を發見して、之を世間に示し、無識の智を開きて國家の進運に補益すべし

一 統計に於て余の守る所の十戒あり、左に示す

- 一 謹慎にして粗忽に爲すべからず
- 一 堅く中立を守るべき事
- 一 偏頗の事あるべからず
- 一 政黨に加入すべからず
- 一 數字に屢々正誤をなすべからず、統計の信用は地に墜つべし
- 一 事實を主として一意之に據るべし
- 一 事實なる數字を私に増減するは大禁たるべし
- 一 有る物を有りとし、無き物を無しとし、足らざる物は足らずとし、知れざる物は知れずとし、其の事物を知り得べき事を務め、妄りに憶測を用ふべからず

第一回統計講習會に於て



一世間の状態及び習慣に注意して常に怠るべからず  
統計は學校の教育を受け、三箇年間も勉強して始めて卒業し得べき程の學業なれば  
一場の演説素より大意のみ先づ是にて畢りたり

附  
録



左の表紀は駿河國沼津、原二箇所の人別調なり、徳川氏の駿遠に移り新政を施すに際し、明治二年先生の建議に因りて實行し漸次全封に及ぶを期せられしものにして、我國現在人別調の濫觴と稱すべし、今や諸政歐洲の制度に著々進歩するも國勢調査所謂センサスに至りては未だ實行の期を見ず、然るに三十年前封建割據の遺習未だ除かざるの時に當り、假令一小部分の調なりと雖、實地に之を施行せられしは其識見の卓偉なる豈賛歎せざるを得んや、乃ち此に附載して其典型を示すこと、爾り

### 駿河國沼津政表

駿河國駿東郡沼津		明治二年己巳五月十六日より六月朔日迄の調	
町數	二十三	男	女
村數	三	男百人に女の比例	
市	三千七十四	三千二百四十二	百五人四餘
在	二百二十二	二百三十九	百七人六餘
小以	三千二百九十六	三千四百八十一	



































寺首の言戦て人其を配其なる  
 内土の門せ浄の  
 寺員皆せ  
 他るの門す

下	甲	信	近	美	尾	山	越	攝	備	小	僧	神	佛
總	斐	濃	江	濃	張	城	前	津	前	以	男	主	侶
	一	一	一			一				二千八百八十九	十七	二	十七
					三					一	女		一
										三	社		一
										六十四	寺		一
										二千九百九十一			
										一			
										六十二	庵		
										五			

上	武	相	伊	三	遠	駿	原	駿河	生	死	生	男	癩疾
總	藏	模	豆	河	江	河	原	國	男				跛
一	三		十二	一		九	千五百五十九	男					男
	三					二	四	僧					一
							醫學修行	職人弟子					
	一	一	二				五十八	奉公人					
			十六				千六百六十二	女		死	生	女	女
								尼					
			二				六十	奉公人					
								飯賣女					
						四							



一月平均  
五厘  
四厘  
七厘

總計 十九 二 一 六 一

家屋	宗門	人員	禪	時	日	選	淨	土	真	言	總	計
地持家持 百四十	借地家持 二百七十九	借家建 二十一	九百二十九	十五	百二十七	二千五百二十九	四百四十	計				

農	自作	自作	小作	右人員
八百八十八	二百十六	四百四		

大工	左官	表具	木挽師	染物師
八	一	一	一	一
船大工	鍛冶師	鑄師	板屋師	桶師
一	一	一	一	一
草履師	仕立師	竹籠師	植木師	黑鐵師
一	一	一	一	一

工の類 十五人 員 二十三

穀	雜穀	酒造	酒賣	醬油	菓賣	乾物	蕎麥	飴商	魚問屋
六	四	三	四	一	一	一	一	一	一
仲賣	魚賣	魚賣	魚賣	魚賣	魚賣	魚賣	魚賣	魚賣	魚賣
十二	五	一	一	一	一	一	一	一	一
藥種	質物	油物	材木	壘物	荒物	桶物	小間物	古道具	草履
十二	一	一	一	一	一	一	一	一	一
種	種	種	種	種	種	種	種	種	種
四	一	一	一	一	一	一	一	一	一

右之外諸種業體の者

本陣	脇陣	旅本屋
二	一	十九
宿	馬脚	飛脚
二	一	一
元	網師	立屋
四	一	一
七十	一	一

二二

二〇







駿河國駿東郡原番		明治二年己巳六月二十八日	
非人	八	男	七
		女	七

生	國	男女總計		十五	
		男	女	男	女
		七十六歲	一	七十六歲	一
		妻死せし者	一	離縁せし者	一
		夫二十三歲	一	夫	一
		婦十八歲	一	婦	一
		四十歲	一	四十五歲	一
		四十四歲	一	四十四歲	一
		四十四歲	一	總計	一
		三十七歲	一	三十七歲	一
		二十三歲	一	二十三歲	一
		十七歲	一	十三歲	一
		十一歲	一	六歲	一
		十八歲	一	十八歲	一
		四十四歲	一	四十五歲	一
		八	八	七	七

駿河原	原	原	原	原
駿	原	伊	小	宗門
河	豆	以	日	人員
四	三	八	逆	十五
六	一	七	家	數
			借地家持	二
			業	町
			業	内
			業	見
			業	廻



一 政表御取調相成候儀は凡そ天下之事物逐一政表之上に相記候儀に有之候故名實  
齟齬いたし候様にては利害大に御政務之上に關係いたし候儀に付御趣意柄能々  
民心に徹底いたし事實明白に相調候事第一に御座候然る處是迄數百年來被行來  
候舊法も可有之又御新政以來被仰出之條々も可有之夫是を以民間にては新舊之  
法度繁雜に相成候儀も難計候に付上下隔絶之弊無之様無用を化して有用となす  
御沙汰之事も可有之候得共先づ其根本を御除相成候は上下合體之御趣意相貫  
事實明白に取調も出來仕候儀と奉存候間此段別紙に申上候

皇化を海外に施させられ候には御國內之人民皆御國恩を存一民も不殘同心協力  
仕候様相成候事是第一之儀に御座候箇様之事は申上候にも不及儀には候得共世  
之開化に進み候と處置の上とに大に相違致し候へば却て開化を妨候事も西洋之  
古に例多く有之候凡そ世之開化に進み候には三様之別有之候事に御座候一は有  
形之産に御座候有形之産と申事は農工之道開け候儀に有之候農之道開け候得ば  
以前よりは好き五穀出來蠶も綿も茶も總て農産之物善く出來候工之道開け候へ



ば以前よりは道路家屋石垣堤防器械の類見事に相成蒸氣器械も鐵道も傳信器も出來又新規工夫之要具も造出したし候様相成候事に御座候一は無形之産と申事御座候是は理學算學化學器械學等之法を以農を教へ工を教へ段々上手に相成候様訓導いたし候無形精神より出候技藝學術之道にて考へ出候故無形之産と申候此有形無形之産よりして諸物之開も出來候事に御座候一は精神之開と申事御座候扱精神開け不申候はでは此二産之道も開け兼候精神之開けは人道之開候儀にて是文道に御座候文道を開き候事肝要に御座候然るに其文道之開けを害いたし候第一の惡習有之候此惡習は何事ぞと申候へば奴隸の俗に御座候奴隸の俗は開化之大害にて西洋も古は奴隸之俗盛に被行候内は國內治り兼兎角騷亂之世のみにて年を経申候方今に至ては此惡習一洗いたし候故其盛なる事今日の如く相成申候此事は萬國歴史に明に載せ有之候扱奴隸之事は別儀にも無之候人に區別を立仕切を付候事にて人之知見區別之中仕切之内より外に出候事難出來人心次第に愚鈍になり追々貧民乞食之類多分に相成國産もいつとなく乏敷成行國もいつとなく衰微に至候は是皆奴隸之醜俗より生候事に御座候戰國之世には區別も仕切もなくなり人々才智を勝手に働せ候故士よりして豪農富商にも成り名士も出

銀治屋より名將も起り賤民より天下を治る人も起り候戰爭毎に奴隸之風相止み候事は西洋之歴史に相見申候抑も奴隸之俗生じ候淵源有之候此淵源を除き候事國之第一急務に御座候此十年前北亞墨利加之内亂は奴隸を廢すると廢せざるとの議論より事起り連戰數年終に南部方道に背候者降服に相成西洋數千年來之大業を開き人民大約同一に歸し候様其比の新聞紙に相見へ申候皇國も武家之世には此弊有之候處此度御一新之折柄御除相成四民頗る一歸いたし農商之者へも其器量相應に夫々官祿等被下候儀實以難有御事にて御座候右申上候通り世界の勢兎角戰爭を経候はでは開化に赴兼候處皇國之民は此災を蒙らず御仁徳を以開化の域に至候段國家の幸福無此上も次第に御座候乍去御德澤未だ天下に普からざる事も有之候哉に奉存候間一二條左に申上候

一 四民互に婚姻いたし候儀御差免之事

右婚姻之義御差許相成候は、第一民を重んぜられ候御主意貫徹いたし士も農も商も工も互に親み厚く相成士之權威に畏れ農工商之奴隸之心に成り候舊習も自然相息且又士之農を好み工を好み商を好み候者も自分之志に任せ勝手に職業を勤候様相成人之區別仕切は廢り只職業之區別のみに相成夫々職業之巧者出來有



名無實之弊も止可申候經濟之道は職業を貴び候事に御座候職業さへ盛に相成候はば國はいつも豊に相成候農工商之内一つ衰へ候へば二つも隨て衰へ國も亦次第に零落仕候故人民同一に相成各々所長之業に就候様相成候事急務と奉存候尤も箇様之義は世運に隨ひ人情に任せ捨置せらるべき寛大之御處置には候得共諸藩に於て矢張舊習に泥み婚姻の法を固守いたし候様にては再び舊弊を生じいつ迄も改不申候間御布告相成候様仕度候事

一 土下座御禁止相成候事

右土下座之事は御國民を奴隸にいたし候惡習に御座候畢竟是れ戰國之頃降服之士民を駕御いたすため武將一時之權道を用候事にも可有之哉亂世には斯る權術も無之ては國家治り兼候義も候得共宇内文明開化之時に方り至極之惡風にて皇化之妨にも可相成哉既に昨年元大小名より封土人民奉還いたし候以上は億兆之民是皆皇土之齊民にて有之候處民間に土下座被行候ては第一御國體に不相叶且又異國人に對し殊更御失體に相當可申此弊此儘被差置候ては異國人へも手を土に着頭を土に垂犬馬同様之心に罷成智恵も廉耻もいつとなく失果候故西洋にても奴隸の俗を惡み候義に御座候何卒皇國之民風儀美大に相成候様仕度候事

右二箇條之儀相改候得ば數年之後風儀更に開化いたし候のみならず別に大に御國益に相成候事も多く可有御座哉に奉存候此十年前之洋書に亞細亞亞非利加は國豐饒にしく物産之富歐羅巴に超過す然れども政事苛虐に陥り人民奴隸に沈み候故歐羅巴之航船貿易工作之三ツを以二洲之産物は皆歐洲之所有となるべしと記申候其實誠に驚くべき事共今日に有之候歐羅巴人斯く着眼いたし居候是も全く有形無形之産相開け不申故に御座候皇國之人民心より開化いたし候様相成候へば農工商之業も大に進み國債之法も相立集議之事も被行隨て國産饒多富強之御運びにも大に助成可仕哉と奉存候

七月

一 別紙之儀は天下之御爲に相成候程之非凡之儀には無之非凡之事は中々私如きものゝ及ぶべき儀にも無御座候唯々世之常之事と存込申上試候尤も政表取調候には人一身之上より數千萬之人に相當り候心得に無之候ては取調も出來兼殊に新規之儀に付猶更其心得を以自身可守筋無之ては難相勤候其守るべき事は別に勘



辨も付不申唯信を本といたし候外無之事と存罷在候に付別紙之條々御執行にも  
相成候はば人民も益々信仰いたし眞實に可申出哉と奉存候若又御執行之儀方今  
六ヶ敷御場合も御座候はば別に愚考も付兼候間御用御座候迄御免被成下候様御  
取計被下度奉願候

午七月(明治三年)

杉 亭 二

右書面七月二十九日大隈大藏大輔の直に差出置候事

政表之儀御尋に付大畧書取を以申上候

一 政表は西洋諸國に於ては「スタチスチック」と唱へ即形勢表之義にて人國之成行を表  
示する學科に有之候依て其成行之模様如何なる哉を熟覽し凡人情世態之變遷國  
運之盛衰等詳知可仕箇條左に申上候

國土

一 國土之里方坪數總民口田畑之里方反數郡邑之里方坪數村落家數之比例人口家屋  
之増減家持借家之總數新規取建之家屋土藏總數増減道路堤防山林牧野廢地開拓  
之地並鐵道傳信線之里數又新開之運河港口河川之數並里方商船漁船渡船川舟橋  
梁之數又新規製造之船數等一切増減比例を記候事

右政表之儀は土地之廣狹人民之貧富國力之強弱を計較し及び殖民地等御設相成候  
には必用之事と奉存候

人民

一 生國男女並生死之數嫁娶離縁再縁出稼入稼之數癡疾病症之類並人數流民乞食及  
犯罪之人數年齡大小學校教師並學生之數學科等級之別工作技藝之人員商賈之種  
類宗派之數檀家之増減等總て其類を分品を舉げ凡そ人之變遷を記候事



右政表之義は風俗之美惡開化之高下を年々に被成御覽政令を御執行相成候には第一之義と奉存候

産物工作

一米穀蠶糸絹木棉反物獸皮茶紙苧麻藍玉藥種種物之高敷並鹽油酒砂糖鯉節海草椎茸之類又金銀銅鐵石炭石等掘出之高漆器陶器家具又蒸氣船鐵道傳信器馬車人力車等總て新規工造之諸品種類通計樹木之類鳥獸之數又新に蕃殖せる馬牛羊鶏豕之類に至る迄品格並總計直段之高下を記し比例を立候事

右政表之義は追て天下之租稅御改革之節諸物之稅相當なると相當ならざると御會議相成候には第一御入用之事と奉存候

一政表御取調之儀に付全國御取締向にも可相成と心付之一二條左に申上候

一華士卒僧侶之輩大畧人口總計暗輝と相分兼候得ざりも農に歸し候歟商に歸し候歟何業體を營み候歟或は貧民に陥入候歟其成行並人員等年々政表之上にて御分りに相

成候は御政務に相關り一大事件之儀と奉存候

一某國に於て貧人流民並罪人乞食之徒多く有之候は其縣治術之巧拙に相關候儀若治方は宜候とも右等之徒澤山に相成候はば其縣之人民多くして之を養ふ國力乏

敷歟又は水旱不作之故歟風俗不宜歟何れも政表之上に相顯候に付地方官處置之

善惡自然御辨解相成候哉と奉存候

一諸省政表之義先頃より取調中に付出來の上差上可申候

一和蘭國政表中より拔萃仕置候一事を左に相載候

和蘭國總民口三百四十萬餘人の内

西曆千八百六十一年中

一人殺子殺毒殺人

男 十四  
女 十七

一殺害を謀りし者

男 八人

一賈金を取扱ひ通用せし者

男 一人

一金銀を後闇せし者

官 五人

一火付

官 五人

一賄賂を取ると訴へられし者

男 三人

一牢逃を謀ると訴へられし者

男 三人

一子を捨しと訴へられし者

男 一人  
女 一人

千八百六十二年中



一人殺子殺毒殺人

男 二十五人  
女 一人

一殺害を謀りし者

男 五人

一火付

男 十六人  
女 二人

一官人無法を働かしし者

男 一人

一賄賂を取ると訴へられし者

男 一人

一半逃を謀ると訴へられし者

男 一人  
女 七人

右様彼之政表中に相見候私儀素より政表學専門に相學候儀にも無之且書籍に乏敷候間追々英佛米國等之政表御取寄に相成候得者猶又夫是參考可仕候其内には御國內總民口も相分り右罪科之人員等取調も出來彼我開化文明之理合書取可備御覽と奉存候

一政表之大綱細目に於ては言語に盡すべきものは之を書記し其盡すこと能はざるものは表に製し圖に畫し一事一物も殘す處なく相認候間右書取之儘にては御分りも如何と奉存候に付私實地相試み候沼津原の政表相添差上候尤も是は僅に十餘日の間に取調其後引續出來兼不具の物には候得共右書取の大意と御見合被下政務の具經濟の要と申事御推察可被成下候以上

壬申正月

杉 亨 二

別紙政表之事御施行相成候義

皇國開闢以來今日御盛舉に至候は誠に難有御事に御座候然るに歐洲に於ては今より二千二百年前希臘に始り其後羅馬帝制之初代アウギヌスチヌス帝政表を熟覽いたし國力を計り國境を定候事も彼國歴史に載候程之義にて當今に至ては精微を極め事實明白に相成候に付淺學短才之私一己之微力にては御施行之件々に付行届兼候義も有之候間勅任之長官一員御撰舉政表之事務御委任被 仰付候様御取計被下度願候以上

壬申正月

杉 亨 二



政表之概畧且政務御施行に於て必用たる儀は昨春以書取陳述仕候通に御座候爾後退て後命を相待候得共何等御沙汰無之竊に疑惑罷在候大概歐洲諸國にて政務を施行するには總て政表上に於て斟酌候儀にて政表を以國家經綸之第一要事と致し候元來國家之盛衰は人民之隆替に由り候儀勿論に有之政表には第一に人民之智愚勤怠貧富及風俗之醇澆藝術之高下よりして土地之肥瘠物産之多寡其外日常事物之形態迄遺漏なく事理明白に記載致し全國之大勢を表出任候然る處當今人口取調之法未だ其宜を得不申先年民部省に於て設立之戸籍法至て煩細に涉候様相見へ畢竟父祖親族之續を取調候事専務と相成政表に於て必用たる事件乏敷様存候就ては人口戸數産業等精々簡便に取調方相立其詳細を得候様無之ては廣く其他之事物に及し兼差支候に付右戸籍法之箇條無用を省き有用之廉に御改正相成候様仕度且又戸籍取調の儀に付先般静岡岡縣へ問合候處昨壬申年二月より九月迄戸長等給料其外にて一萬二千兩餘相掛候趣右を以て全國三府七十二縣を概算候得ば大凡昨年分にて百萬兩に至可申候莫大なる民費に候得共其實前文之次第にて民間にては却て戸籍法之爲め困苦仕候事共比々傳聞仕候依之全國戸籍法之儀實用第一簡易に御改正相成然る上差向き關東地方に於て別に一箇國大實地政表御取調相成度就ては文書布達

而已にては事務分り兼候より空論多く徒に手數相掛り所益有之間敷候間其地方へ當課より巡回實地跋涉之上御趣意貫徹候様懇切に世話致し候はば民心も居り合取調出來可仕既に私儀先年駿河に於て施法相立經驗仕候儀有之候間此上表記整理之分追々刊行昨年辛未政表御頒布相成候手續に仕候得ば各地方官に於ても大に事務を了解致し追々全國に及候様可相成と存候尤も歐洲諸邦之如きは數百年前より傳來之成規有之且累世積年講究候事に付事理記載方極て精密宜を得候得共皇國に於ては昨今御創設之儀に付急速全備を得候様にも難行届追々順序を經卑近より高遠に及し不申では逆も規模相立兼候に付右御詮議之上政表實地取調方御委任被成下度此等之儀は兼て御成算可有之とは奉存候得共何分事務差支歇止難仕候に付別冊形勢學論譯成之分草稿之儘相添再應不願冒瀆此段陳言仕候

明治六年三月五日

杉 亨 二



昨年正月畧陳政表之要，上之閣下，適不見省，以爲日參萬機，未遑思之也。蓋譬之織累尺寸不已，則遂成丈匹，當且擇淺近易知者而表之，以待閣下之或省焉。然前日以本課屬地誌，亨二謂尙未省之也，乃陳政表之事，重上閣下，未有所諭，復有以本課屬財務之命，亨二惑焉。竊歎曰：閣下終不省之也，而又以爲方今聖明在上，勵精圖治，事苟足以益國家，以不見省之故，默々而止，豈可謂忠乎？此亨二之所以復冒瀆閣下之聽而不憚也。夫政表表全國之形勢也，歐洲名曰須多知數知以久，其爲務，土地則田野之廣狹肥磽，山林之生殖，江海之運輸，人民則男女之差，職分之別，智愚勤惰，貧富老少，以至物產之豐歉，工作之精粗，教化風俗之正邪，淳澆學術兵力之深淺，強弱國情之向背，外交之利害及金穀出入，制度沿革之事，凡現在事物之迹，網羅綜核，悉表記而不遺，要在執政者據之，以慮施設之先後緩急也。海外諸國號稱文明富強者，必有此設，聞頃魯西亞欲大講政表，徧招致諸國形勢學士，專討議其法，在歐全權大使之所知，夫彼諸國致今日之隆盛者，雖亦由人民自強之力乎？政府誘掖之功爲最至，興一利除一害，皆察形勢爲之政，常行於所無事，民樂從之，不察形勢而或激水堰苗，以欲取功於一時，則其弊有不可勝言者。天下事物至多，形勢日異，固非耳目之力可能洞悉，如欲洞悉之，舍政表將何求乎？閣下明知其事務重且大如此，則知非地誌財務之可以屬矣。然而事係創造，表記之規燧，未得其梗概，卒然

做海外諸國而立法，則扞格支吾不可行，勢不得不漸次從事，故有難求効於目前者。亨二之所以欲累尺寸，意實在於此，而至事之成否，固由信任之重不重，今誠選通內外事務簡練達政者爲之長官，重任課務，則不出數年，而其業將有大可觀者。再併前日所陳之書及形勢學論翻譯未成稿上之，伏願閣下參觀垂察。

明治六年五月

七等出仕杉亨二恐惶頓首謹白

太政大臣閣下  
參議



26/8/36

明治三十五年八月十二日印刷  
明治三十五年八月十五日發行

(非賣品)

編纂者

世良太一

東京市牛込區市ヶ谷船河原町十八番地

發行者

横山雅男

東京市麴町區紀尾井町六番地

印刷者

佐藤喜市

東京市京橋區八官町十九番地

印刷所

忠愛社

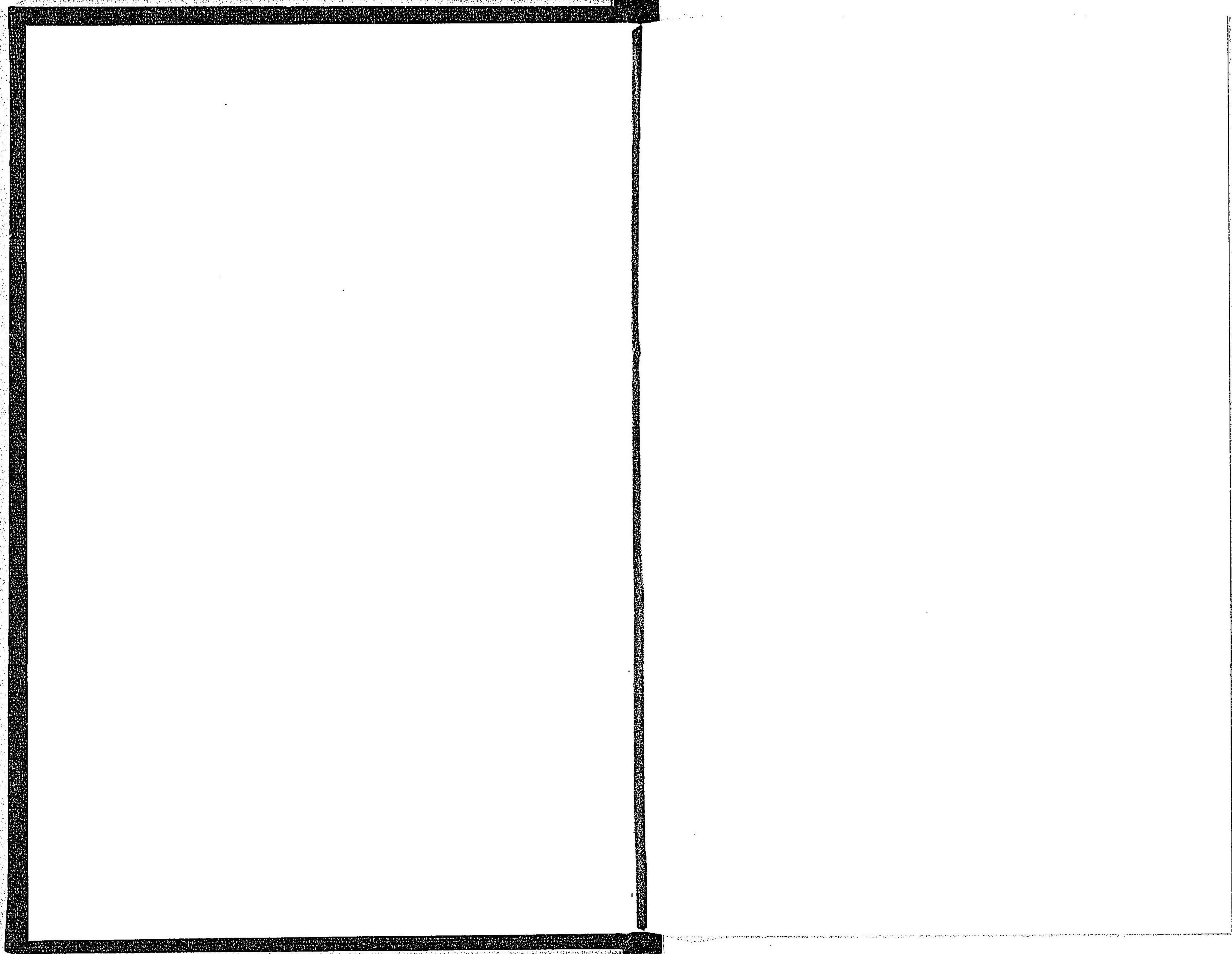
東京市京橋區八官町十九番地

不許  
複製

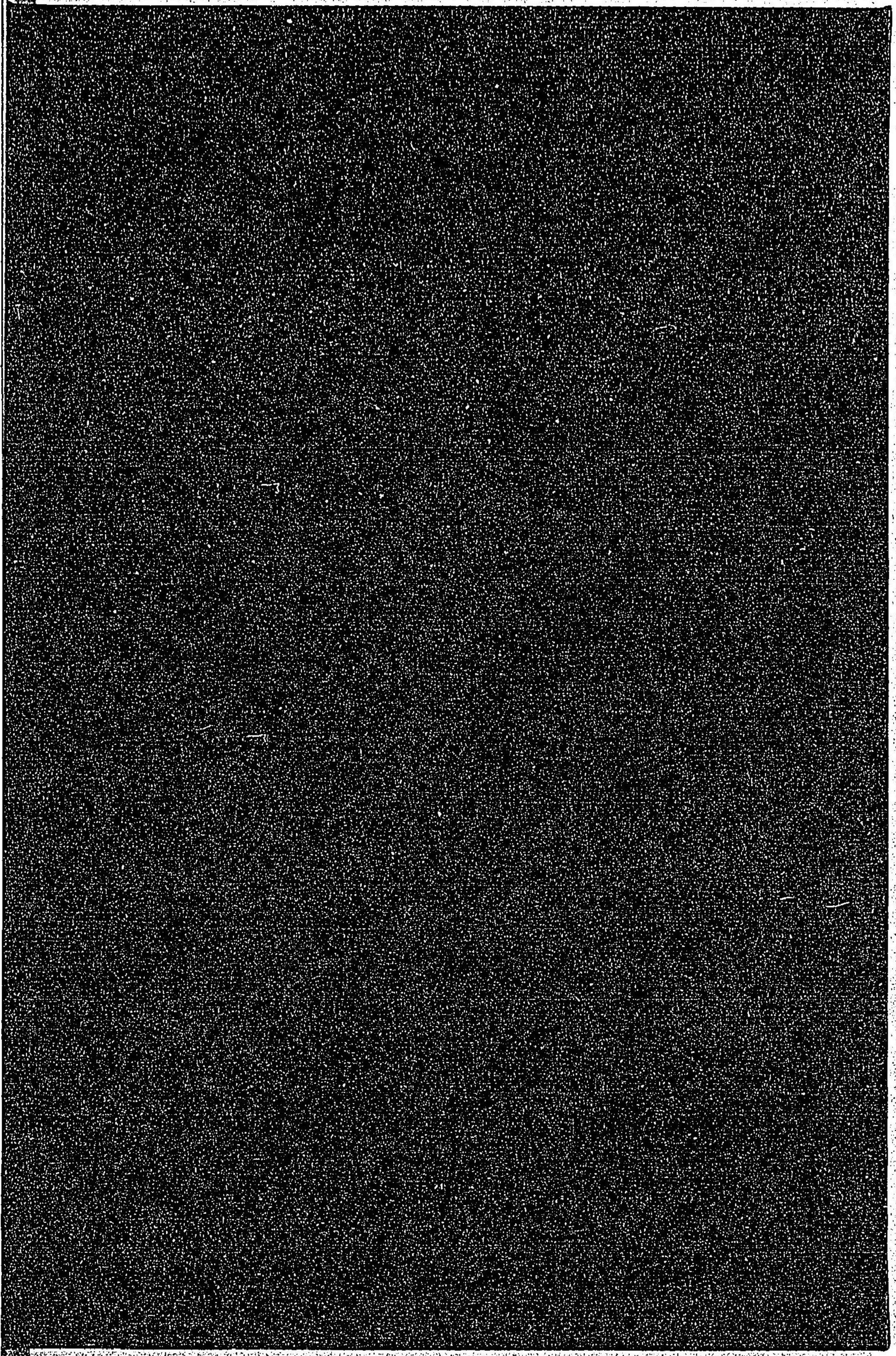


212432











73  
183

102144-000-1

73-183

杉先生講演集

杉 亨二/述

M35

EAF-0139





